

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十二卷第九号
日本幼稚園協会

9

好評発売中!!

幼稚園における心身に 障害をもつ幼児の指導事例集

文部省・著

障害をもつ幼児を受け入れる心構えと、指導の事例を豊富に提供!!

本書は、障害をもつ幼児に対する指導のあり方や、受け入れに当たっての考え方など、基本的なポイントを示したものです。各地の幼稚園の指導事例が豊富に紹介されていますので、実際の保育指導に

大へん役立ちます。

- 情緒障害、精神発達遅滞、視覚障害、肢体不自由、聴覚障害、などの障害をもつ幼児の指導の実際を紹介。

A5判・184頁・定価90円

保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

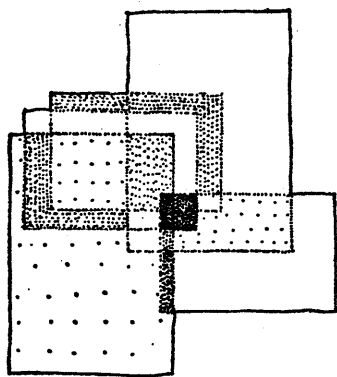
「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価6,750円

幼 児 の 教 育



第八十二卷 第九号

幼 児 の 教 育 目 次

——第八十二卷 九月号——

© 1983

日本幼稚園協会

| | | |
|----------------------|-------|------|
| 言語ゲーム | 堀内 守 | (4) |
| 一枚の絵が生れるまで | 品川 幸恵 | (6) |
| ニュージーランドにおける就学前教育の歴史 | | |
| ならびに現状(一) | 松川由紀子 | (13) |
| 私の幼児教育論 | 大戸美也子 | (22) |
| 私の保育 | 久保敦子 | (27) |
| 小児科医として最近思うこと | 岡田真人 | (34) |
| 子どもと共なる日々 | 豊田芳子 | (38) |

近代短歌にあらわれた子ども(十二)……………大塚雅彦(44)

私のまわりの子どもたち……………佐藤京子(52)

エリックソンと幼児教育(19)……………仁科弥生(56)

表紙 紙 織茂 恭子
表紙題字 比田井和子
カット 福田 理恵

言語ゲーム

堀内 守

あのことは消えかかっている。

「二百十日」ということば。節分からかぞえて「二百十日」にあたる日。大風が吹き、大雨が襲ってくる。以前は「颶風」と書いた。いまでは「台風」と書く。この字を見つめていると、身体がむずがゆくなるような気がしてならない。

少々記憶をたぐりよせてみると、「颶風」という字になれる前には「嵐」という言い方が子どもたちの世界で流通していたようである。「あらし」の音は「荒らし」にも通ずるから、子ども心に「荒ら荒らしい」状態をそこから感じていたのかもしれない。

「颶風」は上級生たちの用語であった。幼ない私たち

が「嵐」ということばを使っていると、彼らは私たちが小馬鹿にするような口調でからかった。私たちも背のびをしなければならぬ。背のびをして、そっと「颶風」ということばを口にしてみた。半分は大きくなったような気分、半分は住みなれたところから住みなれぬ世界に引越した気分である。

何かをおぼえていくことは、このような背のび、ないし移住と似たしくみによるのかもしれない。

節分と二百十日の間には「八十八夜」がある。「二百十日」という表現に親しんでいたころには、節分と八十八夜と二百十日とは一連のつながりをもっていた。このうちで、節分はまことにテレくさい思い出につながっている。毎年、節分近くになると、作文を書かせられたからだ。

先生は「思った通り、感じた通りに書きなさい」と言ってくれたが、子ども心にはこの指示は抽象的すぎた。このことばに忠実であろうとすれば、子どもは文

章を書くことはできない。「いま文を書こうとしている。書くことができなくて困っている」というようになつてしまふのだから。

「八十八夜」は、なぜ「夜」がつくのかふしぎであつた。しかし、「八十八夜」のイメージは軽快である。

例の「夏も近づく八十八夜」のメロディにつながるからで、あの伴奏の「トン、トン」が身体を軽快にくれる。子どものころはあの「トントン」が歌詞であるかのように思いちがいをしていた。

「二百十日」は断然ちがう。「颱風」の襲来は通常の世界を根底からつきくずし、日中でも空は暗雲で暗くなり、あたり全体がゴーという音でみだされてしまう。身のまわりでは雨戸がガタガタ鳴り、バケツが大風で翻弄され、樹木が根こそぎになり、枝も裂けてしまふ。「二百十日」はこわい。

この「こわさ」は、高所に登ったときのこわさとも、暗闇にむけるこわさともちがっていた。「颱風」

という擬人化した魔物が世界をのし歩く。

この「こわさ」があつたおかげで、「まんじりともしないで」とか「野分」とか、その他もろもろのことばの表にひそんでいるおどろおどろした意味あい伝わってくるのかもしれない。

「まんじりともしなかった」という表現は、当時の少年読み物に出ていた。「二百十日」が過ぎたあと、子ども心にそれを使つてみたかつてたまらなかつた。

「きのうの晩はまんじりともしなかった」と遊び仲間告げたら、だれも感心してくれなかつた。残念だったから、年上の友だちに向かって同じことを言つてみた。相手は「ふん」と応じただけである。しかし、その表情にはさまざまな意味あいがかめられていたように思う。

「まんじり」の意味をうまく伝えることはむずかしいが、九月になると、このときの奇妙な背のびを思い出す。

(名古屋大学)

一枚の絵が生れるまで

品川幸恵

入園した頃のK君は、保育室の中央に坐ったり、ロッカーの中に入りこんでは、周りを注意深く見回していました。「外に遊びにいかない？」などと誘うと安心したように笑い、私の隣りでスキップするようについて来るのですが、何か、ぶつぶつ言っているのによく聞いてみると、「何で幼稚園なんかあるんだよ。どうして幼稚園になんか来なくちゃいけないんだよ。こんな幼稚園つまらないよ。バスもないじゃないか。歩いて来るのは疲れる。」と、早口でちょっと口を曲げ横目でにらむように話すのです。

砂あそびに誘ってみると、他の子は砂の感触にとびつき、サラサラとした白い砂や冷たいドロドロの砂に歓声

をあげていましたが、K君だけは砂場の太い鉄柱に寄りかかったまま、身動きひとつせずうつむき加減に横目でにらんでいました。「K君、気持ちいいわよ、素足になつてみない？」と声をかけると、「きたねえからやんねえよ。よくそんな事やれるねー。きたなくないのかよー。」と言うのです。「冷たくってニョロニョロしてて面白いわよ。」と、どろどろの手を見せると、驚いた顔で見えてきました。今まで汚れて遊ぶ経験をした事がなかった様です。そのうち、近くの子の泥がK君にはねてしまうと本当に困った顔をしてうつむいてしまい、目にはジワーッと涙が浮かんできました。「汚すとお母さんに怒られるんだからナー。」と言いながら汚れた所を一生けん命こす

っているのですした。「K君大丈夫よ。先生からお母さんにお話するから。K君のお母さん優しいから分かってくださるわよ。」と言うと、「お母さんなんてやさしくないもん。ぼくが何かすると、すぐ怒るんだからな。」と目からポロポロと涙を流しながら言うので、「帰るまで乾くように、こっだけ洗おうか?」と言うと、「いい。」と頑なに拒み、一センチ四方くらいの泥はねをしきりにこすっていました。

また、他の子がひざの上ののっけていても、おそらく今までお母さんのひざは赤ちゃんだけのものだったK君には信じられないようで、「お前、赤ちゃんじゃないのに、なんでダッコしてるんだよ。おかしいぞ、お前は赤ちゃんだー。」と、ひざの上の子の目の前に、人さし指をつきたてて早口で言うので、「幼稚園では先生がみんなのお母さんなんだから、ちっともおかしくないのよ。ヒザの上っていい気持よ、K君も坐ってみない?」と話す、「いいよ、僕赤ちゃんじゃないからな!」と怒ったようにいってロッカーに入りこみ、じつと私達を見ていました。また「今何時?」「お帰りまであと何分?」と十分きざみに聞いてきます。降園時間になると人より早く

身仕度をし、周りの子どもに「お帰りの時間だよ。」といったような大声で伝えるのですした。

幼稚園生活の中でも特に自由な時間が彼にはとつても苦痛のように見えました。自分の家の近くの仲よしの男の子はみんなバスで送り迎えのある別の幼稚園へ行ったのに、なぜ自分だけこの幼稚園にこなくちゃいけないか、幼稚園には知っている友だちもいない、家に帰れば友だちと遊べるし、好きなおもちゃもある。家の方がずっといい。友だちと同じ幼稚園に行きたいのに言ってもお母さんは聞いてくれない。大人は僕の言う事なんかちっとも聞いてくれないんだ。と言っているように思えました。

そんなK君が反応を示したのは、怪獣ごっこでした。男の子数人と私が戦っていると、彼も突進してきました。「K君やったなー。」とむかっていくと、「どうだ、僕のパンチは強いだろ、ザマーしろ。お前なんかやつけてやるからなー。」とぶつかって来、少しでも不利になるとつねるのです。それは彼の内側にある不満や怒りなどうっせきしたものを外にはき出しているかのようでした。つねられた痛みよりも、K君とのつながりがやっ

見い出せたようで、その日私は満足していました。そして六月ころまでそんなくり返しが続き、そのうちにK君は自分から私にダッコしたりオンブしたりされるようになってきました。私は、彼の変化が嬉しくて、ヒザの上の彼の重みがこちよく、彼も、ヒザや背中であちと照れながらも、「いいだろう。オンブしてもらったぜ」と周りの子に眩くようになってきました。自分で「赤ちゃんみたい。」と言いながらも、心の奥ではK君自身それを望んでいたのです。ことばと反対の彼の内側が、少しずつみえるような気さえしてきました。

ところが、それが一ヶ月以上毎日、毎日、執拗に続き、「ダッコしないとつねるからなー」「オンブしないと噛むからなー」のくり返して、ダッコしても腕をつねっては、「これ痛い?」「これは?」と、私のいやがる事を、これでもか、これでもかというようにやってくるので、はずんだはずの私の心はたちまちべしゃんこになり、K君の存在がうとうとしくさえてしまっていました。時には逆に思い切りつねってやりたい気持ちにかられた事も何度もありました。しかし私が少しでもそんな様子を見せると、彼はサッと私の心を読みとり、ロッカー

の中に入りこんでしまうのです。大人への一種の不信感に包まれた彼は、私がいっただこまで自分を受け入れてくれるのか試していたようです。そして、初めて自分を受け入れてくれそうな大人のぬくもりを味わい安心したり、自分の力をみせつけたり、そして楽しい話題の乏しい彼は、つねったりしながらも自分の方に私の気持ちを向けようと必死だったのかもしれない。

頭でそうは考えてみても、短気な私は、軽く聞き流したりすることができず、彼と一緒にいるとイライラし、つい避けてしまいたくなり、自分の未熟さ至らなさを感じずにはいられませんでした。そしてKが休みだったリ、そばにいなかったりするとホッとするのでした。

そんな私の心が敏感なKに通じないはずはなく、そのうち廊下の壁によりかかって無表情で、どこを見てもなく立っていることが以前よりも増えてしまいました。私が誘うまで何時間でもそうしていました。しかしちょうどその頃、彼一人ではなくM君も一緒に同じように廊下に立っていたのです。このM君も全体で課題を与えられると喜んで活動するのですが、自分から遊ぼうとはせず、いつもK君と私のそばに坐っては、私たちの遊ぶの

をニコニコ笑って見ている子どもでした。しかし、Mの場合は印象が円満で、いつもニコニコしています。クラス友だちからMへの誘いが多いのですが、Mはそれのことわりきれずに涙ぐむことがままありました。

話しかけられなければ話さず、それでもいつもニコニコしているM君と一緒に、K君は何も話さずに表情を変えずに一メートル位ずっと離れて何分でも立っているのです。声をかけられるのを待っている様子もあり、いつ声をかけようか、壁に立つ前に何か遊びを紹介しようかなど考えるのですが、私は無意識に心の奥で彼を遠ざけていたのかもしれませんが。もちろん、彼が好きな怪獣ごっこや、すもうなどをする時は、「やるやる、」と駆けよっては来ましたが……。

そんな一学期の後半、初夏を感じさせる日差し暑い日のことでした。私が砂場で遊んでいると、砂場の柱に寄りかかっていたK君が小声で「僕もやってみようかな。」とつぶやきました。私はブルッと身体が震えました。あのK君がやっと……という喜びが伝わってきました。「冷たくって気持ちいいわよ。」と言うと、自分からイソイソと靴をぬぎ泥の中にとびこんできました。砂の穴

の中に入り、僕の足もうずめてくれー!」「あー、抜けなくなつた、助けて、くすぐったーい。」「今度は、お前を埋めるからな、どうだ、」などと大声をあげ、私も彼も興奮状態でした。それから毎日が砂遊び。「早く砂場に行こうよ。」と、K君に手をひかれる日々が続きました。砂あそびの最中にも、彼は私の目の辺りに指をさしだして、「バカだな、お前は、そんな事も知らないの?」などと話しかけてくるのですが、それでも少しずつ泥の感触が心を柔らげてくれていることが砂とふれているKの目の輝きから感じとれました。

Kは自分ができることには、他の子を押しかけてでも「こんなの簡単だよ、できるよ、貸してごらん。」と意欲的に取りくみ、反対にできない子がいると、「え?、こんなのできないのバカじゃないの?」と笑うのです。そして新しいことや自分ができないと思うことには、全くといったいほどとりくもうとしません。

例えば、逆立ちをしている友だちの足を私が押さえている時、彼もじっとそばで見えています。声をかけると、手を横に振って後ずさります。しかしずっと見ていて、最後のひとりになって周りに子どもが誰もいなくなる

と、「やる!!」といつて来るのです。それまで彼は心の中で「僕にできるかな。できないかな。失敗したら誰かに笑われないかな。」などと、考えているのでしょうか。そして、周りに誰もいなくなつて初めて、やつてみようという気持になれるようでした。周りの目を必要以上に気にするブライドの高いところがありました。

したがって絵や製作のように形に表われることはほとんどやろうとしません。Kの頭の中で、こう描きたい、こう作りたいというイメージがあまりに立派で大人っぽいので、自分の技能がそれについていけず、自分自身で自分の作ったものに満足できないようでした。彼はそんな自分自身に腹を立て、「できないんだよー。」とか、「手が痛い。」と涙ぐむのです。

また、園内で飼われている小動物への接しかたにも特徴がありました。名前に興味をもつて図鑑とひきくらべたりするのは早いのです。保育室のザリガニを何日もあきずに見つめていて或る日突然「先生、水こんなにいっぱいじゃ死んじゃう。石入れておかないと、隠れる場所がないじゃないか。」と言いますので、「じゃ、ちょっといっしょに手伝ってもらえない?」ともちかけると、

「ボクはいいよ。いいよ。」と手を振りながら逃げてしまいます。その後友だちたちが、さんざんさわつたザリガニの中の一匹を、そーつとつまみあげたK君の手は、なんとブルブルふるえておりました。知識的な興味や関心をもつことと、実体験の違いの大きさをK君のふるえる手が私に教えてくれたように思いました。二期はそんなKをただ見守ることの多い日々でした。

そして三学期、今まで友だちがなかなかできず、自分から友だちに近づこうとしなかったK君が、二期ごろからM君と少しずつ話すようになり、ある日、園から帰ってから約束してK君がM君の家に遊びに行ったというのです。そして、その日から二人はまるで今までの二人と別人のように、M君もホッペを赤くしながら積極的に話し、K君も負けじと楽しそうに二人でうなずきあいながら話しあうようすがみられました。

「きのう、M君の家へ行ったんだよ。ナッ」「そうだよ、ナッ」。「そして、ケシ取りかえっこしたんだよナ」。「M君の家ってすごいんだ。ケシ、こんなにいっぱいあるんだぜ」などなど……二人は、目をキラキラ輝やかせ、つばをとばしながら次から次に話してくれました。二人の

変化に私はおどろきながら、はずみのついたその話に時を忘れるように聞きいったものです。すると今まで、怪獣ごっこを見ているだけだったM君が、K君と一緒に力いっぱいぶつかってきたり、今までのK君とのイラだちがうそのように思える楽しくて心地よい毎日がやってきました。友だちの大切さについて改めて私も考えさせられ、二人が慎重に友だちを自分で捜しあてた喜びを傍に、二人が慎重に友だちを感じさせられたのでした。

冬の日、園舎の屋根を見上げて、「サンタさんは、屋根の上を通ってくるかナ。となかいにのってくるのかナア。」と、うたうように呟くのを聞いたこともありました。情緒的にも柔らかな、夢のあるイメージをもっているのを感じました。

そして三月、もうすぐ年長組に進級というある日、絵の具を使う機会がありました。M君は描いた後、他の友だちと外へ出て行ってしまいました。「ボク、絶対やらないヨ。」とさっきから何度も同じ言葉を繰り返しながら私の周りをウロウロするK君。真面目な彼は、他の人がやったことを自分がやらないということに耐えられない様子でした。そうだ、今のK君なら大丈夫！ 私はちょ

っと押してみることにしました。「K君ならできるよ、やってみよう！」少し語調を強めると、大きな目に涙があふれ、「手が痛い！」と言いはじめました。いつもそうやって逃げてばかりいては……と私はそれでも押してみました。私の心の中ではもう大丈夫という確信と年少ももう少しで終わりという焦りがありました。しかし、彼は「きのう、ぶつかった手が痛い！」と涙をこぼしながら繰り返し、どうしてもやろうとしません。私はその場を離れなければならぬ用事ができて、しばらくしてから戻ってみると、彼は、涙も乾いた顔で笑いながら私のそばにきました。「手はもう直ったの？」と聞くと、「へ？ あれウソだよ、へへへバカだなーだまされた！」と、いつものように人さし指で人を指しながら笑う彼を見て、私は悲しくなりました。いつもこうやって自分のいやなことから逃げるような子になってほしくない！ そんな気持ちでいっぱいでした。ふたりで園庭の鎖に腰かけながら、私は何とか彼にこの気持ちを伝えたいと思いました。

「あのねK君、これからK君年長組になるでしょう？ 年長になっても、いやな事やできない事たくさんあると

思うの。でも、今みたいにできないからって、やらないでいる？」彼は、困ったように下を向き、首を横に振りました。「できないことって、ちっとも恥ずかしいことじゃないんだよ。先生だってできない事たくさんあるし、そんな時は園長先生や他の先生に教えてもらうんだよ。K君は力も強いし、やればできると思うの。それなのにやらないでいるのは、心が弱いんだと思う。できないことよりそっちの方がずっと恥ずかしいことだと思うナ。先生はK君にそんな弱い人になってほしくない。分からないときは、教えてって言ってくれれば、先生の分かることは喜んで教えてあげるから……。」そこまで言うのと、私は声がつまり涙がこみあげて来ました。気がつくとK君の目にも涙があふれ、ボタンと一粒手のひらに落ちました。しばらく二人で何も言わずにおでことおでこを合わせていました。今考えると私は何て、直線的な言い方だったんだろうと思いますが、その時の私の総てをぶつけた言葉でした。そして、彼もそれを吸いとってくれたように感じました。

それからしばらくたったある日、私は絵を描く機会をつくりました。私の気持のどこかに、K君の気持を確か

めたい……そんな願いがあったのかもしれませんが。私は祈るような気持で画用紙を配りました。そんな私の心に答えてくれるかのように、彼はためらうことなく自然に絵に取り組み、そして彼にとっては初めての一枚の絵を描きあげました。それは顔から足の出ているひとの絵で彼の満足のいく作品ではなかったかもしれませんが、表情があり、画面の中央に大きく描けていました。私はその絵を見た時嬉しくて胸がズンと震えました。「頑張ったね。」「やつぱりK君できたんだね。」「勇気が出せたね。」「……」などいろんな言葉が私の頭の中に浮かんでは消えていきました。結局私は、自分の気持を伝えるべき言葉が見つからないままK君の方を見ると、K君も私を見ていました。こみあげてくるものをこらえながら、黙ってうなずくと彼もうなずきにつこり笑いしました。

K君が脱ごうとして脱げない自分の殻のなかでもがいていて、初めて外界に向かって素直に自己実現する快よさを自分できりひらいた記念碑として、K君の描いたあのときの、あの絵はそれから何年たった今でも私のイメージにはつきりやきついている大切なたった一枚の絵なのです。

(所沢市立第二幼稚園)

ニュージーランドにおける 就学前教育の歴史ならびに現状（一）

松川由紀子

はじめに

ニュージーランドの就学前教育について述べる前に、若干この国の歴史を紹介しておきたい。

ニュージーランドは、一八四〇年、原住民マオリ族との間にワイタング条約が成立し、英国の植民地となった。⁽¹⁾そして、ウェリントン、ネルソン、オタゴ、カンタベリーなどに計画的な植民がなされ、一八五二年には憲法が定められた。先住民と入植者とが苦しい生活のなかで国家を建設していき、一九〇七年には自治領となった。世界大恐慌の後、一九三五年には労働党が政権につ

き、大規模な社会保障制度が採用され、以来、福祉国家への道を着実に歩んでいる。

一八七七年から無償の義務教育が実施され、一九三六年には十九歳までの教育はすべて無償になったが、では、就学前の教育はどのような歴史をもつて発展していったのだろうか。わが国では、ニュージーランドの就学前教育の歴史ならびに現状については、ほとんど全く研究されていないが、就学前教育史研究にとって、あるいは今日の就学前教育を考えていく上で、非常に興味深いものである。以下、詳しく紹介していきたいと思う。

— 初期のフリーキンダーガルテン

(1) ダニーデンのキンダーガルテン

一八八九年六月、ニュージーランド最初のフリーキンダーガルテンが、ダニーデンのウォーカー通りのミッションホールにおいて開園された。ダニーデンは、一八四八年にスコットランド人の入植したところで、金発掘やそれに伴う人口増加に助けられて繁栄したオタゴ地方の中心地である。

では、どのような経過で、最初のフリーキンダーガルテンは設立されたのであろうか。聖職のワデル博士 (R. Waddell) は、ダニーデン・イブニングスター紙の編集者コーエン氏 (M. Cohen) にあてた手紙 (一九一三年四月十五日付) で、次のように設立当時を回想している。⁽²⁾

……毎日、ウォーカー通りを行き来していた時、通りに放任されていた多数の幼い、馬鹿騒ぎする、だらしない服装の、はだしの子どもたちの姿がしばしば私の

印象に残っていた。特に冬の寒い雨の日に、曲り角や戸口の上り段で歓声をあげている、こうした幼い子どもたちの光景を見ると、「こうした子どもたちのために何もなされ得ないのだろうか」と自ら問いかけていた。彼らの家庭は貧しく、家のなかには彼らのための部屋はなかった。それ故、彼らは通りに放任されていた。こうした幼い子どもたちを教会のホールに集めて、暖炉を与え、雇用人ではない若い女性に子どもたちの楽しい相手をさせる、という考えが胸に浮かんだ。そうすれば、子どもたちは家屋ならびによい影響を得るだろうし、何人かの若い女性たちにはキリスト教的な活動の場——それは時がたつうちには彼女たちの責任になっていくものであるが——を与えることになるだろう。キンダーガルテンの着想は私の思索のなかにあった。私は、その着想を次第に発達させようと思ひに想ひ描いた。それから、私は貴殿に会いに行った。どうして貴殿に相談する気になったのか、今は忘れたが、それは、貴殿が教育の仕事に協力的で、キン

ダーガルテンの問題に特別な関心をもっていたからであつたように思う。……貴殿は、キンダーガルテンの着想にただちに飛びついた。貴殿は、レノルズ夫人 (W.H. Reynolds) の関心を得ておくべきだと提案し、私は夫人の関心を得た。それから、私たちはさまざまな問題を論じた。その次に、ケルシー嬢——当時、彼女は彼女の学校でキンダーガルテン的なやり方で何らかしていたので——に相談したように思う。貴殿は、教育養成を受けた教師 (trained teacher) を確保すべきであるという意見をはっきりもっていた。しかし、どこで教師が確保され、どこから教師に支払う金銭が得られたのか。私は、教師の給与として必要な資金を集められるかどうかを調べることにとりかかり、そして、グレイ氏を訪問した。驚いたことに、彼は、年に二十五ポンド、それを二年間寄付するという約束をしてくれた。グレイ氏の事務所から出た時に抱いた、歓喜のわくわくする感じを今でも覚えている。教師の給与は五〇ポンド考えていたが、それが私たちの手の届

くところにある、と私は感じた。そして、そうだった。それから、私たちは——ケルシー嬢からだったと思うが——教育的側面よりもむしろ伝道的側面に関心をもっていた。教育養成を受けた教師、ワイニキ嬢 (W. Wienieke) のことをきいた。彼女は、クライストチャーチのパパヌイで、一種のキンダーガルテンをつましくしていた。この時までには、私たちの小さな仲間が委員会に発展していた。……私は、ワイニキ嬢について調査する任務が与えられ、そしてそれをした。私は彼女にいくつかの事柄について説明した。彼女は喜んで行くと述べた。彼女が最も好ましく思ったのは、計画のなかの伝道的側面であつた。……委員会で賛同され、彼女はやって来た。教会は、私の依頼に応じて建物を無料提供した。……それからレノルズ夫人の援助が得られた。……私の記憶する限り、これがダニーデンにおけるフリーキンダーガルテン運動の初期の歴史である。

こうして、多くの人々の善意と寄付によって最初のフリーキンダーガルテンが設立された。なお、ワデル博士は、四十年間、ダニードンの長老派の聖アンドリュー教会の聖職にあった人である。また彼は、二十七年間、ダニードン・イブニングスター紙の週刊コラムの寄稿者であった。フリーキンダーガルテン運動は、既述の通り、その誕生を、幼い子どもたちの必要とするものに対する彼の理解に負うている。

では、当時、このフリーキンダーガルテン運動を推進した人々は、フリーキンダーガルテンをどのようなものとして考えていたのだろうか。一八八九年三月、最初のフリーキンダーガルテンが創立される三カ月前、その創立を目的にした会議がタウンホールでなされ、そこで（先ほどのワデル博士の手紙のなかにあった）委員会が設置されたのであるが、その時の様子が、オタゴ・デイリータイムズ紙（三月五日付）に詳しく報道された。スーター司教（Bishop Suter）は、タウンホールに集まった多くの聴衆を前にして、次のような見事な演説をし

た。そこには、当時の運動を起こした人々のキンダーガルテンならびに就学前教育に対する理解が、どのようなものであったかがよく示されているので、これをみてみよう。⁽³⁾

今夕、私たちは青年のことではなく、子どもたちのことを考えている。青年期の教育はやっと最近になって相応の注意を得てきているが、子どもたちの養育は、いまだに考慮されていない。この方面の改善に対しては、二人の男性に負うところがある。それは、スイス人のペスタロッツと、プロシヤのチューリッゲン生まれのフレーベルである。フレーベルは、ペスタロッツの弟子で、一八五二年、非常な老齢で死んだが、多くの改革者たちと運命を共にし、無政府主義的傾向へ転嫁し、社会主義ならびに非宗教のかどでプロシヤ政府より非難された。神が教育の最初の段階において認められなければならない、そして宗教に基づかない教育はすべて非生産的である、と明記したまさにその人で

あったのだが。そして、英国や米国において、最も宗教的な影響を強調する人々の間で、フレーベルの体系は支持され、広められていったのだが。……

一歳から五、六歳までの時期は、注意を要する。

……最初の印象、そして概念や習慣が形成されるこれらの重要な数年が、私たちに最も慎重な取り扱いを要求する時、私たちは、次のような諸事実に気づく。子ども達の心の感受性。知的、宗教的、肉体的な（これが最も強い動機になる）いろいろな活動から得られる喜びの感覚。驚異的に早期に発達する模倣の機能。……同情の感覚。社会性の感覚……。成長の原則。……

さて、私たちはどのように始めるべきであろうか。

ここでは、子どもたちに学習入門書を仮定しない。それは、たやすい。私たちの仕事はもっとむづかしいものだ。子どもたちの本性は、すべて互いに異なっている。誰ひとりとして同じ観察力や活動力を有しはしない。この点で、個々人の承認ということが、キンダーガルテンのひとつの基本的な特徴になる。むづかしい

ことだが、それ故、誇り多いものになる。キンダーガルテンは個々人の本性を取り扱い、それらを集合体とはみなさない。……

私たちが、いやくもこの点を理解したならば、こうした仕事をうまくなすためには、教師として最も注目値する人物を要しなければならない、という結論にならざるを得ない。天性は教師の性別を指し示しているようである。これはあまりにも母性的な問題であるので、女性以外に任せられることはできない。もし、キンダーガルテンの学校が公平に扱われるならば、それは、必然的に費用のかかるものである。小学校一、二年よりも、児童数に対する教師の割合はより高いものを要し、そして、適確な教師は容易に確保されるわけではなく、確保された時には高給が支払われなければならない。しかし、結果は非常に重要なものである。

このように、フリーキンダーガルテン運動の指導者た

ち（ワデル博士、コーエン氏、スーター司教たち）は、すでにこの時点から、社会的救済面だけでなく、就学前教育のもつ重要性、とりわけ教師の重要性を理解していたことがわかる。この会議で、委員会（後のダニーデン・フリーキンダーガルテン協会）が設置され、レノルズ夫人を委員長としてそのメンバーが選出された。フリーキンダーガルテン設置のための手段、方法を探究することが委員会の任務とされた。そして、三カ月後、仕事の伝道的側面に関心をもったワイニキ嬢が最初のフリーキンダーガルテン教師として就任し、キンダーガルテンが開園されたのである。ワイニキ嬢は、その間の事情をレノルズ夫人にあてた手紙（一九一三年五月二日付）で、次のように回想している。⁽⁵⁾

最初に私を訪ねてきたのは、ヴァード嬢を同伴したフリーマン嬢でした。私は、クライストチャーチの私の学校で大変幸福でしたので、最初はダニーデンに行く気になりませんでした。しかし、子どもたちの親

たちの家庭で、多くの機会が私に与えられるだろうと考えた時、私は主にこの歩みについて尋ねました。

フリーマン嬢は、数カ月後にワデル博士が訪問するだろうと私に申しました。フリーマン嬢の訪問はクリスマス休暇中でした。ワデル博士が訪ねてきて、午前中、私の学校を見学して、そして私に、ダニーデンでフリーキンダーガルテンを始めてみてはどうかと尋ねました。私はキリスト教徒ですので、キリストについて教えないかもしれませんが、その条件が受け入れられるならば引き受けられます。と博士に伝えました。

博士は、貴女はキンダーガルテンの教育が容認するすべてのことをするように教えることが認められています、と私に申しました。博士とのこの会見後十日ほどして、私は、フリーキンダーガルテンの教師として委員会に承認された、という博士からの電報を受け取りました。また、私はその電報で、六月一日にダニーデンにこられるかどうか尋ねられました。

キンダーガルテンは、六月十日に開園される予定です

したが、十四日に延期されたようにはつきり覚えております。……

なお、レノルズ夫人は、ダニーデン・フリーキンダーガルテン協会の会長（一八八九—一九〇〇年在任）として運動に献身した人である。

その後、ダニーデンにおいては、一、二のキンダーガルテンが設立されたり、閉鎖されたりしたが、一九〇六年に南ダニーデンキンダーガルテンが、一九〇八年にはキャパーシムの長老教会ホールに一園が開園された。⁽⁴⁾ 後者は、後に一九二六年、ハドソン兄弟から寄贈された建物に移転し、リチャード・ハドソンキンダーガルテンとして新たに出発した。前者は、独立した園舎を建設するために熱心に資金集めがなされ、一九一四年、当時ニューージーランドで最も設備の整ったキンダーガルテン、レイチェル・レノルズキンダーガルテンとして（レノルズ夫人をたたえて）新たに出発した。その建物の様子が、オタゴ・デイリータイムズ紙（一九一三年五月五日付、

土台石が据えられた時）に、次のように報告されている。⁽⁶⁾

グラウンドに太陽がよくあたり、庭として利用できるようにできるだけするために、建物は敷地の背後に接して建てられていた。建物の全長に渡って幅広いベランダが設けられていて、その両端には日よけが施されている。八十名を収容するホールはいろいろな目的に使用できるだろう。……また、ロッカー室、教員室ならびに台所も設置されている。

そして、一九一四年には、三カ所のキンダーガルテンに二七九名の幼児が参加していた、と記録されている。

(2) クライストチャーチのキンダーガルテン

一八八九年に設立されたダニーデンのフリーキンダーガルテンが、ニューージーランド最初のフリーキンダーガルテンとして位置づけられ、キンダーガルテン史上、注

目されているが、すでに一八七八年、キンダーガルテンのメソッドはカンタベリーのいくつかの学校に導入されていた。⁽⁷⁾ 英国でフレーベル式の教員養成を受けていたクウィーニー嬢 (A. Guiney) が、キンダーガルテン関係の女教師として、クライストチャーチの師範学校に任命されていた。一八七八年のカンタベリー教育委員会の報告には、彼女はベスタロッツとフレーベルの教育原理に基づいた実践をしていて、かなり成功をおさめていたが、建物の不備、不十分な援助のために、その活動が妨げられていた、とある。そして、一八八〇年には財政の後退があり、教育助成金は削られ、キンダーガルテンのメソッドは中止され、その後一九一一年まで再建されなかった。しかし、クライストチャーチにおいては、私的なキンダーガルテンは設立され、盛んであったという。

そして、一八九八年、任意団体の児童援助会（後のクライストチャーチ・フリーキンダーガルテン協会）は、恵まれない家庭の子どもたちの救済のための立法導入を求めたり、キンダーガルテンやクレッシュ（保育園）の

設立を唱道したりした。特に、会の秘書であったマックームズ夫人 (E. McCombs) は、病気の母親、働く母親たちを援助するために、キンダーガルテンの設立を強く主張していた。翌一八九九年、会の後援で、サンビームキンダーガルテンが設立され、私的な寄付や親たちからの少額の保育料支払いによって、一九一〇年まで維持された。一九〇五年には、児童援助会下のフリーキンダーガルテンに二三五名の幼児が通っていた。

これらのキンダーガルテンの設立、維持のための費用を工面することは厄介なことで、会の活動の継続をおびやかすほどの費用がかかっていた。そこで、一九一一年、公の協議がもたれ、「クレッシュならびにキンダーガルテン」協会の設置が決議され、初代会長にテイロア夫人 (T.E. Taylor) が就任した。そして、「きれいな庭と明るく通風のよい建物、ならびに就学前教育に対する最新の方法で教員養成を受けた教師が必要である」といった規準を作成したり、ウェリントンの視学長を訪問して、キンダーガルテン教員免許状を交付することの必要

性を力説したりした。一九一一年、協会下のフリーキンダーガルテンとして、新たに独立した建物においてサンビームキンダーガルテンが、また、フィリップスタウンキンダーガルテン（一九一一年）とシデウンハムキンダーガルテン（一九一二年）がそれぞれストリートホールにおいて設立された。

一九一一年、師範学校のキンダーガルテン・メソッドの責任者に任命されたインクペン嬢は、翌年、サンビームキンダーガルテンを訪問して、有資格の教師と二名の見習いのもとで、よく計画されたプログラムがくりひろげられていたことを報告している。この教師は、協会によって「英国出身の女性で、キンダーガルテン、メソッドに精通していて、就学前教育の経験もかなりあり、非常に推薦できる」と評されていたハル嬢(H. Hull)であった。彼女は、英国でフレイベル式の教員養成を受けていた人で、クライストチャーチのキンダーガルテン教員養成面の指導者として二十五年間務めた。なお、キンダーガルテンの教員養成は、一九一一年から一九四一年ま

では、このサンビームキンダーガルテンで行なわれていた。

このように、クライストチャーチにおいても、ダニール同様、社会的救済面だけではなく、キンダーガルテンにおける有資格教師の重要性が運動の初期に理解されていた。(山口女子大学)

註

- (1) このところは、キース・シンクレア著『ニュージーランド史——南海の英国から太平洋国家へ』（評論社、一九八二年）を参考にした。なお、この著者はオークランド大学史学科の教授。
- (2) Helen Downer (ed.): *Seventy Five Years of Free Kindergartens in New Zealand, 1889-1964*, New Zealand Free Kindergarten Union, 1964, pp. 5-7. なお、この編者は、ニュージーランド・フリーキンダーガルテン連盟の会長（一九五七—六六年在任）。
- Ibid.*, pp. 8-9.
- Ibid.*, pp. 10-11.
- (3) *Ibid.*, pp. 7-8.
- (4) Isobel Christison: *A Survey of Preschool Educational Services in New Zealand*, Unpublished M.A. thesis, Victoria University of Wellington, 1965, p. 13. なお、この著者は、教育省の就学前教育専門官（当時）。
- (5) 以下の記述は、次の書物を参照した。
- (6) Patricia M. Lockhard (ed.): *Kindergartens in New Zealand, 1889-1975*, New Zealand Free Kindergarten Union, 1975, p. 20.
- (7) Myrtle Simpson: *The Free Kindergarten Movement in New Zealand*, New Zealand Free Kindergarten Union, 1970, pp. 7-9. なお、この著者は、クライストチャーチの上級視学官（当時）。

私の幼児教育論

私は、この四月、十年振りに短期大学の保育養成の仕事に復帰することになった。この十年間、四年制大学の幼児教育学科から保育専門学校に至る保育者養成校にかわり、学生の指導から現職保育者の指導まで参与し、幼児教育の渦中ですごしてきたのだけれど、久し振りに出発点に戻ってみて、私は改めて幼児教育の変貌の姿に隔世の感を強めている。一体、幼児教育の何にどのような変化を認めるに到ったのか、その実態を明らかにする



大 戸 美 也 子

ことが「私の幼児教育論」の主題である。

一、幼児教育の現在

我が国の幼児教育は、この十年の間に質・量の全体にわたって大きな変化を生み出してきたが、中でも最も印象深いことは、個々の事象の変化内容よりは、さまざまな変化が重なりあって、「幼児教育」の概念あるいは「幼児教育」という言葉によって前提としてきた内容を

変えてきたことである。これまで「幼児教育」という言葉によってどのような教育を前提としてきたかといえ、それは家庭外の幼稚園や保育所で専門の保育者によって遂行される健常児の教育のことをさしてきたのではなからうか。「幼児教育」という言葉には、無意識の内に一定のワク組が用意されていたのである。しかし、この十年間の幼児教育をめぐる変革的な試みは、知らず知らずの内にこのワク組をとりはずし、新たなパラダイムで幼児教育をとらえることを私たちに求め続けてきたように思われる。たとえば、統合保育の興隆は、健常児のみを対象とする幼児教育のワク組に亀裂を入れる働きをしたし、たて割保育、オープン保育の浸透は、年齢・クラスのワク組から子どもたちを解放させ、また、乳幼児の母子関係の研究の進展は、親、特に母親の教育的役割、あるいは家庭における幼児教育の存在を人々に自覚させ、幼児教育の地平線を、幼児教育施設内から家庭にまで拡げる役割を果しているとみてよいのではないだろうか。このように幼児教育の現在をとらえると、今私た

ちがとり組まなければならない最大の課題は、健常児・障害児を含めて、誕生の時から幼児期全体にわたって、しかも家庭でも幼児教育施設でも共有できる概念の追求であり、具体的にいえば人間を人間に育てる基本的経験の探求ということである。

二、人間を人間に育てる基本的経験

人間は、どのような経験を通して人間になっていくのだろうか。健常児にも障害児にも共通する、また誕生の瞬間からはじめられその後継続して受けることのできる経験、そして、生活の場所を問わずできる経験というものがあるのだろうか。この問に關して、人間の基本的存在様式を洞察して、人間が「関係的存在」であることを指摘した松村（一九五八）の見解はきわめて有効である。彼によれば人間は外界あるいは自己との「関係」を拠点に自己を形成し、人間に必要な言語をはじめとする諸能力を育て、人間が人間になっていくのである。

このことは、人間が誰でも他者の胎内に宿り、胎児は

母体との交流を基盤として生命を形成していく事実、また出産について外界に出たあともかなりの期間、他者の加護を受けてその生命と人格を育てていく事実からも肯けるところであり、また近年興隆をみている胎児、人間の初期経験の研究あるいは言語習得前のコミュニケーションの研究によっても明らかなどころである。たとえば、パニー（一九八二）は胎児が母親と生理（ホルモン分泌など）、動作、情緒の三つの回路を使って交流をづづけていることを明らかにしているし、スターン（一九七七）も生後3ヶ月頃までに親と子が殆ど同時に相手の出方をよみとり、やりとりのプログラムを作って丁度ワルツでも踊るように母子の間で流暢なやりとりが展開できることを観察している。これらの研究は、人間は、胎内にいる時から人間との「関係」の中に生きていくにふさわしい行動のメカニズムをすでもっていること、

またこの行動のメカニズムは成長と共に複雑化して異なる様相で展開することを示唆している。従って、乳幼児期の子どもたちとかかわる保育者は、発達によって変化

するさまざまな位相のかかわりについて理解を深め、子どもが今、どの位相のかかわりを展開しているかを素早くとらえ、相手をしながらそのかかわりを充実させていくことが大切である。

そこで、次に乳幼児期のいろいろなやりとりの具体的な姿についてみてみよう。

三、「やりとり」の種々相

人と人とのかわり、やりとりは、「言葉」によってのみ行なわれるものではない。音声言語を獲得するよりはるか前から、さまざまな手段を媒介に交流が行なわれている。

すでにみたように胎児期には、生理、動作、情緒の三つの回路を通して交流がはじまっており、乳児期には「呼吸」「微笑」「動作」「物」などを媒介とした交流への変化をしていく。そして、幼児期には、これら交流の媒体に「音声」や「言語」も付け加えられ、一層激しく、変化にとんだやりとりを展開していくのである。たとえば、人間の最も初期の交流の仕方として、「空気」を媒

体とする交流がある。これは、赤ん坊と母親あるいは保育者の間でかわされる交流で、赤ん坊がお乳をすっている間、母親がこれを黙って見守り、赤ん坊が一休みすると、今度は母親が子どもに話しかけたり、…これを交互にとつて交流するあり方で、その他赤ん坊の動きや目の動きに呼応して、母親が相づちをうったりする「対話」もこれに含まれる。また、「微笑」を媒介とする交流は、生後三ヶ月以降にあらわれ、母親のほほえみかけに、子どもが同じく微笑でかえす形で展開する交流の仕方である。母子の微笑交換過程を分析した、イギリスの心理学者リチャーズ（一九七二）は、親と子の微笑交換が丁度対話と同様の構造をもち、たとえば母親が微笑している間は、赤ん坊は比較的穏かな顔をしており、その内次第次第に顔がゆるみ、母親の顔から微笑がきえる頃、赤ん坊の顔に微笑があらわれていることを分析している。

また、同じ頃、「動作」による交流も発生することがスターン（一九七七）によって報告されている。これは、母親が子どもに接近すると、これに呼応するよう

に、子どもは親を回避するように頭を横に向けて回避の動作をし、母親がもとの位置に戻すと、今度は子どもの方が接近してくる……というやりとりである。乳児後期には、物の直接的やりとり (give and take) による交流、二歳児になると人形に人の役割を付与して、それとのやりとりへとすすみ、幼児期になると「追いつ・追われつ」活動のように「動き」「動作」「音声」を媒体としたやりとり、またこれらに一定のルールを介在させてやりとりの展開を規則化した「鬼ごっこ」などがある。

幼児期には、この他、やりとりを主軸とするさまざまな遊びがみられるがその明るいやりとりの底で子どもたちは複雑な、そして時には深刻な経験をしていることを、社会思想史家の藤田省三（一九八七）は「かくれんぼ」の分析を通して、鋭く指摘している。彼によれば、かくれんぼは「さがす」、「かくれる」対極的な役割をとる中で、双方とも「ひとりぼっち」の経験をし、「さがし出す」「さがし出される」経過を通りぬけていく内に「遊戯者としての子どもはそれとは気付かない形で次第に心

の底に一連の基本的経験——對抗しながら相互に救済しあう統合——に対する胎盤を形成していく」（12頁）といわれる。藤田は、かくれんぼというこの最も日常的なあそびに包含されている、人間経験のひな形を抽出してくれたのであるが、このようなアプローチは、日常生活のいろいろな位相で展開される子ども同志、子どもと事物、子どもと保育者とのやりとりの意味を掘りおこす重要な手法を提示しているといえることができる。

すべての子どもを対象とする、誕生から幼児期の生活の全体の中ですすめようとする「私の幼児教育」は、いかにも茫漠としてとりとめがないようにみえるかもしれない。しかし、経験をつんだ漁師がああの方もなく広かった大洋から各種の魚を水揚げするように、私たちも、何気ないやりとりに秘む豊かな人間経験をよみとる訓練、また同じものの中に異質性を、同じものの中に同質性を見い出す洞察力を身につけていくなら、日々の偶然の出会いの機会を意味ある機会に変えていくことができるにちがいない。そのような努力があつてこそ、「高き

を低みにみたり、低みを高みにみたり」、「子どもたちとのやりとりを充実させることができると思うのである。

参考資料

バーニー「胎児は見ている」Non Book 一九八二
Stern, D.: *The first relationship. Infant and mother*, Fontana Open Books, 1977

Richards, M.P.: *Social interaction in the first weeks of human life*, *Psychiatry, Neurologia, Neurochirurgia*, 1971, 74, 35

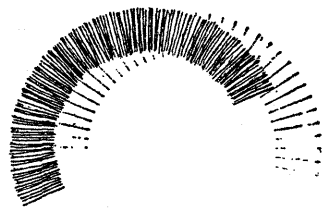
-42-

藤田省三「或る喪失の経験——隠れん坊の精神史」（『精神史的考察』平凡社、一九八七

大戸美也子「保育における交互作用」横浜学園付属元町幼稚園 一九八七

私の保育

——子どもたちとの四季——



久保敦子

春

ばらのアーチをくぐって子どもたちがやってくる。朝、門の前で交すおはようの握手。子どもの手のぬくもりが確実に伝わってきて私が最も好きなひとときだ。この時期、幼稚園で二年目三年目を迎える年長児と新入園児とは、やることなすことすべて対照的である。

年長児は、部屋にカバンを置くと早いか外に飛び出して来る。そして、誰もいない雲梯をゆうゆうと渡り始めたり、さっそく泥をこね始めたりするのだ。一方新入園児の方はというと、暗い部屋の中でいつまでもモゾモゾしている。彼らには、庭は広すぎるのかもしれない。年少児を受け持った私は、しばらくの間、子どもたちの登園を部屋で待つことにした。自分の組の部屋のことをどういうわけか「幼稚園のおうち」と呼んでいる子があるの

だが、この子のいうように、まず部屋を「おうち」にすることである。私は部屋を子どもたちにとって一番心地良い安堵の場所にしたかった。しかし最終的には、皆をもっとすばらしい表の世界のとりこにすることが私の願いである。表にはお日様の恵みがある。土と水と緑がある。幼稚園が一体となった心地良いざわめきがあるのだ。

さて、日が経つにつれて子どもたちは、年長児や自然の魔力にかかって、どんどん外へ引きずり出されていった。そして、初夏の風が吹き始める頃、ようやく、ほとんどの子どもが雑然とした異年令集団の中でくたくたになつて遊ぶようになったのである。降園前、部屋に分かれて集うひとときは、再び、心落ち着かせる時となつた。私は、最初の頃お互いの名前と顔を覚えさせるために考えた、円を描いた座り方を、一方向を向いて体がくっつき合うほどぎゅうぎゅうにつめた座り方に変えさせた。木の床にじかに正座すると、二十一人の子どもと私は小さな丸の中に軽くおさまってしまう。顔と顔が近くあつて、話をするにはこれが一番都合が良い。この体勢で、毎日、私たちは歌を歌ったり、昼間の出来事を報告し合つたりした。心なしか、他人どうしだった子ども

たちがぐんぐん親しくなつていくのを感じた。

夏

水あそびが格別気持ちのよい季節になった。早くも陽焼けした子どもたちは、入園当初に比べると格段にたくましく見える。子どもたちはガウンの下に水着をちらつかせて登園し、海の波やホースから勢い良く飛び出す水と毎日たわむれる。庭一面が泥沼になった。泥水が気持ち悪いのだろうか、何となく肩をすぼませて立っている。私はKと一緒に水たまりに入り、泥をすくつて、指先でKの背中に花の絵をかいた。まわりの子どもたちがおもしろがつて、僕も私もと割り込んで来る。あちらこちらの子どもの背中で、花や動物や乗物たちが元気に踊る。水しぶきが顔にかかると思死に手でぬぐっている。T。水が恐いのだろうか。私はバケツに水をたっぷり汲んでTの後ろに忍び寄る。「Tちゃん!! 頭からかけてあげる。」Tは首を横に振りながら逃げ出した。ダム工事やままごと、お団子作りをしている間を縫って私はTを追いかける。Tは泣いていた。水は嫌いだった。」「そ

れならやさしくかけてあげるから。」ようやく覚悟を決めたTは、両手を合わせて目をつぶり、忍者ハットリ君の真似をする。「そうよ、ニンニンニンよ。」Tの頭の上からバケツの水が滝のようにこぼれ落ちた。

さて、降園の時間が近づいた。水道の前に裸ん坊の行列ができる。「あら、この熊さんは誰にかいてもらったの。」「Aちゃん今日はよく頑張ったね。」とおしゃべりしながら皆の体を手でこすり、泥を洗い流す。「くすぐったいよ。」「我慢しなさい!!」私はこの間、何ともいえないしあわせに包まれている。着換えが終わったあとのほんの少しの時間、子どもたちは冷たい床にころがってお昼寝ごっこをするのが大好きだ。「いまね。こんなゆめをみていたんだよ。」と空想の世界に浸り合う。

秋

夏休みをはさんで子どもたちはぐんと変わった。初めの一週間くらいは調子が出ないが、それぞれが友だち関係を強めつつある。Sは目が見えないのだ。Eは双子の兄と別れて一人歩きを始めた。子どもたち相互の結びつ

きが強まると同時に、今まではあまり見られなかったグループ間の抗争も起こるようになった。遊び場の取り合い、人の取り合いからケンカが起こり泣く子が続出。年長の子どもが仲裁役を買って出る場面も多い。部屋の前に「あそぶものがないからつまらない。」とわんぱく坊主たちが座り込んでいた。私は子どもたちの口からそのような言葉は聞きたくない。少しいたずらがしてみたくなった。「これ、おじいさんたちや。私は二、三人を束にして立ち上がらせ、無理やり抱きかかえて行つて庭の隅のジャングルジムの上にボンと乗せた。「助けが来るまでは降りたらだめよ。」「このやろう!!」とくやしそうにもがく子どもたち。「なにに？きちごっこしているの？ぼくもまぎして。」と寄つて来たのは年長の男児たち。どこにもこういう子たちがいるものだ。そしてこの子たちのおかげでまた、遊びがおもしろいくらい発展するのである。子どもたちは風を切って走り回る。人質をつかまえるために抱きついたり手を引っ張り合ったり、庭中に悲鳴とも歓声ともつかぬ声が響き合った。充滿してくるエネルギーを発散したいかのように、この季節、子どもたちの動きは特に活発のようだ。

冬

朝、おはようをする小さい手が氷のように冷たい。山に囲まれた狭い園庭には帯状の日だまりがあるのみである。それなのに、子どもたちは毎日毎日地面に座り込んで砂のお団子を作る。両足の間に乾いた砂を集め、それをすくっては左手の泥団子の上にかけるのである。かけてはこすりかけてはこすり、これを根気良く続けると、表面がすべすべの球になる。それを今度は頬や洋服で丹念にみがくのだ。熟練した子どもたちは、上等な毛の靴下やコールテンのスカートなど、お団子みがきに最適な素材を心得ていて、それを求めて庭中歩き回る。「せんせい!!」せんせいのズボンでこすらせて。「いいわよ。(こわさないように) 気を付けてね。」お団子作りに夢中になるのは子どもたちばかりではない。「顔が映るようなツルピカ団子」を作りたいがために、大人が子どもそっちのけで本気になって、お団子に丸一日をかけることもあるのだ。ある日、私にしては最上のお団子が出来上がった。黒光りした表面に、その日の抜けるように青い

空や子どもたちの赤いほったが映るのだ。降園前のひととき、例のぎゅうぎゅう座りで顔をすり寄せた子どもたちは、お団子を見せると目を丸くして、「せんせい、すごいじゃん。」「せんせい、よくがんばったもんね。」と一緒に喜んでくれた。私は、やっとの思いで満足出来るまでになったお団子をこわされてつかみかかる、男児の気持ちがかかるし、誤ってこわしてしまった側の子がやるせない気持ちになるのもよくわかるようになった。だから、お互いが気の済むまで泣いたり怒ったり、誠心誠意謝まるのを待って、初めて次への励ましの言葉が出るのである。

再び春

年長組の劇「ヘンゼルとグレーテル」が終わろうとしていた。ひな祭りのお遊戯会である。雨がしょぼしょぼ降っている。暗い廊下で出番を待っているのは二十一人の子どもと私。「ねえせんせい。まだ? いったいいつまでまっっているの?」一人がため息まじりにつぶやく。「もうすぐよ。ほら、最後の歌を歌っている。」そこで私

は、子どもたちを手招きで胸元に呼び寄せた。かわいい視線が集まる。実は本番前にどうしても一言、言っておきたいことがあるのだ。他の先生の前では恥ずかしくて言えなかった。「さあこれから本番よ。今日はお母さんたちがいらしているものね。みんな頑張ろうね。……あのね。最後にちょっとお約束してほしいことがあるの。

みんな劇の途中でよく先生の方を見るでしょう。あれはやめにしましょうね。おかしいのよ、すごく。オオカミも山羊もみんなとっても格好よく素敵に出来ているから、いちいち先生の方を見なくても大丈夫よ。今日はね、ドキドキしたり心配になったりしたら、お客様の方を向いてお母さんの顔をさがしてごらん。きつとニコニコして見ていて下さるから。」この場に及んで半ば懇願であった。

四才で入園して以来一年。この子たちは今日初めて劇を披露するのだ。内容は「オオカミと七ひきのこやぎ」のパロディー版で、このところずっと、帰る前の部屋での時間をその練習に当ててきた。これは、子どもたちが好きで選んだ話である上に、役柄も希望を募って決めたもの。秋の創作展で作ったままごと用の「おうち」をこ

やぎの家に使うことにもなって、皆大乗り気であり、練習は毎日遊びの一コマだった。オオカミがしわがれ声でしゃべるとそのおかしさに歓声が上がる。「うんいいわね。そっくりね。」と私はうなずいた。こやぎが口々に叫ぶ。「おかあさんならやさしいこえだよ。おまえはきつとオオカミだろう!!」元気な子に連れられて、あらあらと思うような子どもたちまでが大声を上げている。私は微笑まずにはいられない。調子に乗ったオオカミは「しまったばれたか。」と台本にもないことを言いながら退場、またまた笑いを誘う。雑貨屋役の女児が私の方をチラッと見た。目が「もうでていってもいい?」と聞いている。間違えそうでちょっと心配な時、「これでどう? かつこういい?」と確かめてみたい時、「うまくいえたでしょう!!」とほめてもらいたい時、子どもたちの目はいつも私の中に飛び込んで来た。私はいつも、笑ってうなずいただけである。それだけで子どもたちは安心して「三ひきのオオカミと八ひきのこやぎ」をでっちあげていった。一カ月間、私たちは劇ごっこを楽しんだ。

さて、お遊戯会を二、三日後に控えて絵練習が始まった。他の組の劇を見るのは皆初めてである。床にペタン

と座らされた子どもたちは、友だちの演技にまばたきもせずに見とれていた。また、練習を終えて部屋に帰る時の機嫌は上々であった。「おもしろかったね。ばら（ぐみ）さんのげき、おもしろかったね。」「サイがさかだちしちやってさ……」「ゴリラがね……」。無邪気なものである。その時私は、まっ暗闇のどん底で頭をかかえていたのであつた。部屋に入ると、私は子どもたちを呼び集めた。「ぎゅうぎゅうづめにして座ってちょうだい。ちょっとお話があります。何事だ、という顔をして子どもたちは集まつた。静かになつて全員の視線が集まつたところでは口を開いた。「みんなね、今日の劇の練習どうだった?」「おもしろかった」。悪びれもせずに大合唱である。「そう、何がおもしろかった?」「ばらさんのげき。」「ねんちようさんのヘンゼルとグレーテル!」「そうね、みんなとってもおもしろかったわね。……それじゃね、みんなの劇はどうだったと思う?」「……」「だってね、Bちゃんたらふざけるんだもん。」「えっ、それじゃおまえはどうなんだ? いっしょにふざけただらう?!」私が言おうとしていることがわかったのか、ひとしきり足の引つ張り合いが続く。「今日のはひどかったわね。見て

いる人たちにはきつと何をやっているのか全然わからなかつたわよ。我が組の劇は惨たんたるものだったのだ。舞台上上がった子どもたちははしやいで。ピコピコ飛びはねるし、袖で控えている陰の役者たちは、二人組になつて「おちゃらかほい」を始める。それでいて、いざスポットライトを浴びる番になると、おじけづいて私の方ばかり見ているのである。私はこの光景を見て体から力が抜けていくのを感じた。もうすぐ年長組になるというのに、この幼さは何だろう。しかし、私にはすべて思い当たる節があつた。だいたい、今回の劇を、見て頂くものではなく楽しむものとして進めてきたのは私であり、その間ずっと私は子どもたちの演出に関与してきたのである。今さら、先生に頼らずに、見てもらつてわかるように演技しなさいという方が無理なのであつた。私はあわて、いら立ちにも似た反省の念にかられた。子どもたちも私のただごとならぬ様相を見て元気がなくなつていく。普段の甘えん坊、ふざけん坊、ちゃっかり屋はどこへやら、皆しゅんとしてしまつた。「このままでは大変よ、どうしたらいい?」私たちは深刻になつた。「えーとね。もうおちゃらかやらない。」「ぼくすぐにて

いけるように、こうやってまってる。」すっきりとまとまった劇にならないのは当然のことで仕方ないとして、これで少しは落ち着くだろう、と私は子どもちの真剣な眼差しを信じることにした。

さて、その当日。本番間際になって、私は、私自身が残してしまった難題の解決を子どもたちに託した。無理は承知の上で、きのうまでの習慣を捨てるように頼んだのだ。「さあ頑張ってね。」幕が開く。劇が始まった。あのように言い出したものの、私は子ども目の目が助けを求めて、また自慢気に私を見るのを待っていた。ところが話が進んでいくのに、いくら待っても、誰一人私を意識する子はいないではないか。私はあつけにとられた。きつねにつままれたような気分で子どもたちを見守った。劇は終わった。皆、最後まで立派だった。

幼くて不安だらけだったのは、どうやら私の方だったらしい。子どもたちはこの一年で大きく、その、目を見張るほど大きく成長していたのだった。「みんな、今日はどうしても良かったわよ。今までで最高だったわよ。」「せんせい、それさつきもいったよ。どうしちゃったの?」支えて、支えられて……、私は、とにかくこの子

たちがかわいくて仕方ない。

私の保育は、子どもたちと共に自然の中で四季の移り変わりを感じながら過ごしてきた生活そのものである。私らしい保育のしかたがあるとしたら、それは幼稚園全体のやわらかい土の中から、今やっと芽を出し始めたところといって良いかもしれない。年少児を受け持ったこの一年、私は子どもたちの言葉に耳を傾け、その気持ちを出来る限り受けとめてやりたいと思っていた。そればかりではいけないことを知りながら、私の心はいつとも、受け入れる体勢をくずせなかった。

成長した子どもたちに向けて、今また新たに、「私の保育」を問いただす時が来たと実感している。

(聖路加幼稚園)



小児科医として最近思うこと

岡 田 真 人

私のような小児科医が、このような専門誌に学問的な価値のあることを述べられるわけもないので、診療の合い間に子供たちについて思ったことを述べていただきます。

一 最近の障害児の早期発見、早期治療という動きについて

大津市を中心として、急速に日本中に広まっている運動として障害児の早期発見、早期治療体制の確立があります。私自身もそれに興味をもった一人であり、かなり検討もいたしましたが、最近のあるグループの研究によりますとボイタ診断法でひっかかってくるうちの大部分を占める軽症者は、何もしないで経過を観察してみると全く正常発育を示すという

こと、重症者に対してはリハビリによって軽快する傾向がほとんどみられないということである。したがってボイタ診断法のみをみて、CP児の可能性があると両親につげることは、無用な心配を与えるだけであまり意味がないのではと思ひ、また重症な障害者にあたかもそれが治るような幻想を与えることもまた問題ある考え方ではないかと思ひます。リハビリテーションではなく残された機能をいかに上手に発達させていくかのハビリテーションの問題であり、決して失なつた機能を回復させるものではないように考えます。

私が新生児の重症仮死児（難産による障害児）の頭部CT傷の研究を行なつた時に、そのような子供達は脳の片方のみの障害でなく、両方の脳の障害を受けていました。交通事故による脳障害や、脳卒中などの障害などは片側であることが多く、残つた健康な側の脳へ機能を移すことによってリハビリテーションが可能になってくることが多く、両側共障害

を受けている場合は、残された機能をいかに発達させるかにかかつており、おのずからやはりその障害の程度によって限界があることを認識する必要があると考へております。

ただ残された機能を最大限に発達させるためにはリハビリテーションは必要であり、その体制の確立は必要であると考えます。しかしその対象となる患者は、放置していても自然によくなる軽症群は慎重にみているだけでよく、親に無用な心配を与えない配慮が必要でかつあまりに重度の障害児の場合親に期待を与えすぎないことが必要であると考えます。

私達の小児科医はそのような障害児を少しでも少なくするために、その障害児の原因の大部分を占める未熟児、黄疸、仮死児に積極的に取り組み、五つ子でみられるように未熟児医療の進歩、黄疸に対する光線療法の開始、新生児頭蓋内出血に対する早期脳外科手術の進歩等により、根本より障害児を少なくする医療体制を作ってきました。日本では昭和五

○年頃よりそのような体制が徐々に出現し、最近の学会への報告では、その一番の目的である、障害児発生数の減少がみられはじめているという、大変うれしい報告がなされています。

残念なことにはまだまだ医学の力は微力であり、完全にそれら障害児の発生を防いだり、治療したりすることは出来ないで、そのような障害児が社会の中で溶け込んで生きていけるように皆様と力を合せていきたいと思っています。

二 登校拒否児について

私の病院には、静岡県との協力で院内養護学級が設置されています。病弱児を対象としたものですが、登校拒否的な子供達も入院して通学しております。この一年間に5名のそのような子供達が入院いたしました。その子供達との関りの中で、私達スタッフが感じたことは、彼らに内的に多少問題は認められ

るが、それは多少なりとも人間が持っている問題であり、その周囲の大部分は親と親子を取りまく社会的環境にあることです。

複雑な両親の関係とそれに振り回される子供の心が登校拒否的な心身症として表われているのであり、私達医療人や、教育スタッフ、ケースワーカー、児童相談所の職員等皆がチームのようになって問題解決のために向って進んでも、社会の大きな壁にぶつかって止まるしかなく、子供達の生活環境としては問題の多い病院の中で子供達は生活せざるを得なかった。閉鎖社会でなく、いろんな子供達と交わりながら大きくなっていくべき子供達が、特殊な環境である病院の中で育っていく姿を見ると、現代社会の持っている心の欠如と、また一般の小中学校が取っている教育態度に憤りを感じ、子供達の将来を思うと暗い気持ちにさせられました。ところが養護学校の先生の献心的な努力により、子供達を信じ、愛情をもって接触していく重要性をよ

り一層認識させられました。治療するのでなく、心を通い合わせる事が最も大事であると思います。

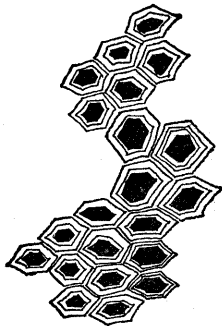
三 チームを組むために

私達医師は、なかなか難しい人達の集まりであり、皆様方からは敬遠されている集団ではないかと思えます。しかし障害児の問題や登校拒否児の問題など、社会的問題と医療的問題が関連してくると、協力してその問題解決に当らなければならない時がきているような気がしております。医師集団は決して特殊な物わからず屋でなく、やや自己主張の強い集団にすぎず、お互いに協力して、地域問題として子供達の発育に関わっていく必要性が最近が増してきているのではないかと思います。いろんなアプローチがそれぞれなされているようですが、一つのテーマについて意見を交換することによって次のよ

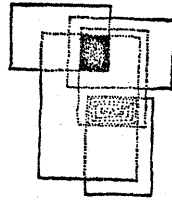
りよいステップに進むことが出来るのではないかと考えております。

とりとめもない事を述べましたが、少しでも皆様のお役に立てばと考えました。

(聖隷三ヶ原病院小児科)



子どもと共なる日々



豊田 芳子

一九七九年 七月四日

初めて病院へ行きました。私達が心待ちにしていたことが起こりました。お母様も喜んでくださいました。共なる日々の始まりです。

こうして一九八〇年三月に長男^{はると}温土が生まれ、二年後には次男^{ひろと}寛土が生まれました。二人の相手をするように

なってからは、育児と家事で一日がちょうど終わりになってしまうふりかえる時を殆んど持たなくなっていると思います。そのことの反省も含めて、前の記録をとり出し、この小文をまとめてみることにしました。

*

心をとどめてみると

一九八一年 十一月十六日(月) 温土一才八ヶ月

私の朝食の片づけや洗濯など一時間程の間、かたわらにいたり、ひとりで汽車や空箱で遊ぶ。ゴミを出しに行こうとすると、「はるとも行くー。」とついて来る。さあ、いったん外へ出ると砂遊びがしたい。私は掃除機をかけたいと思っている。午前中にお客様がみえるのだし、少しはきれいにしておきたいという気持ち。温土はまだひとりで砂遊びはできない。というより、誰かと一緒に遊びたい。それはわかっているが、玄関の戸を開け放して私ひとり先に二階へ上がる。(我家は二階にある)「はるとも、はるともー。」と言う。自分もおかあちゃまと一緒にいたい。ただし砂遊びをしてという気持ちのようだ。「はるとも」と言うわりに、一緒に二階へ上がろうとはしない。そのうち下で、「ママー、ママー、こぼしちゃったの。」砂ならこぼしてもさほど困らないので悠長に、

「そーお、大丈夫よ」などと生返事をして掃除を続けていると、なおはっきりと熱心に呼ぶ。彼の要求にすぐ応じる程、私の心が彼に向いていないのが少し後ろめたく、またかわいそうになってきたのでよしこころで少し見に行つてやるかと降りていくと、玄関の足ふきマットの上にバケツの砂がこぼれていた。彼はとても失敗した、いけないことをしたと思つてゐるらしい。「あらあら、ここにこぼしちゃったの。そーお大丈夫よ。でも気をつけてね。」と言いながら、私が外でマットの砂を払うと、見てもらつた満足、大丈夫と言われた安心感などでもとおしやべりになって、「こぼしちゃったの。はると……こぼしちゃったの：×○……？ こぼしちゃったのねー。」といつもの可愛いしぐさをしている。それを見ると、こちらも少し余裕がでて、ほうきとちりとりを出し、丁寧に掃いていると、「きれいにする」と温土もほうきを受け取り、たたきを掃き始める。「はい、ちりとりも貸してあげますからきれいにしてね。」と声をかければ、得意になつて掃除をする、そして私はまた私の時

を得て二階へ上がった。五分程すると、温土も自分で上がって来た。家事と育児はだいたい相入れないことが多い。どちらかを犠牲にしなければ何もできない。育児だけをしている時は、家事は全く頭に置く必要がないが、家事をする時は子どもを忘れてはできない。私は今の仕事をしていたあなたの方を向くことができない、あなたを待たせているという意識、いつでも持っていないことは。

子どもと大人が互いに明らかに、ああ、これは楽しいと感じられるできごとがあったわけではないけれど、このように日常の淡々とした生活の流れの中で少し心をとどめてつき合った時、子どもも大人も充実した感じを持ち、互いに目には見えない心の豊かさを積み重ねていくのではないだろうか。

……ができるようになった日

日々の習慣的な流れとは少しちがう、心の踊るような

時を過ごした日は、成長の階段をひとつ大きくのぼるきっかけになる事があるように思えます。それまでじっくり貯えてきた力が目に見える形であらわれ、成長として子どもにも大人にもとらえられるのです。そんな一日を主人の記録より

一九八二年 六月二十八日(月) 温土二才三ヶ月

とても梅雨とは思えない程カラッとよく晴れた一日だった。いつもの時刻に帰ると温土は「おかえりなしゃーい」と元気で飛びついて来る。今日は昨晚私がゆっくり寝られたせいか、自分が元気で、温土との一時を楽しむ。ベッドで新聞を読んでいると「はるとも寝よう」とと来るので一緒にゴロゴロしている。なんだか温土をいじめたくなって、倒したり、くすぐったりすると、いかにも楽しそうにキャッキョッと笑う。その後、一緒に風呂。顔に湯をかけると少しべそをかくが全くなまわないふうをしてザーザーかける。温土は「ふいてー」と半泣きになる。でもその後は「おふるって、きもちがいね」などと言っている。最近石けんで洗うのに凝っ

ていて、いろいろな物をひとりで洗っている。私の背中もよく洗ってくれる。息子に背中を洗ってもらえるようになったのかと思うと感無量である。二人してすっきりした後、気持ちのよい夕方なので温土を自転車に乗せて散歩に行く。私自身幼い頃によく行った気入りの線路沿いの道からしばらく山手線を見おろす。二人で同じ物を見るのは楽しい事だ。私は生ビールが飲みたくなって帰り路に焼鳥屋に寄る。酒場に子どもをと思わないわけではなかったが、店がすいていたし、他の客に迷惑をかけていないし、二人して楽しい時を持つかと入る。膝で温土は焼鳥半分を嬉しそうに食べる。早く一緒に飲みたいたものだ。帰り路に店でブドウを二房買う。温土を前にすわらせ、その前のかごにはブドウというわけで時々二人してつまみながら自転車を走らせる。夕暮の空には半月、口には甘いブドウ、風は夏草のにおい、こんな一時を温土と持てて最高。自転車から降りると温土は「アンちゃんにもあげようね」（隣りの子ども）と言うので良い事だと思い、窓越しに夕食中のアンちゃんにブドウを

一房あげる。温土としては、一粒のつもりだったようだが、私が一房あげても、少し意外といった顔をしただけで、あまりいやな顔はしない。夕食は焼鳥を食べた事もあつてか、まあまあ。早くブドウを食べたいらしい。「もう、ごちそうさま？」と聞くと「ぶどうを食べたらね」と答える。ブドウの柄を持ちながら大事そうに食べ、とうとう全部食べてしまうと「あーあ、とうとう木になっちゃった」と実のない房を見ている。ごちそうさまをして椅子から降りるとパンツがぬれちゃったと言う。思えば夕方風呂から出てからおむつをしていなかったわけだ。さぞかし良い気分であつただろう。女房が「今、出たの？」と聞くと「そう」と言う。「もう少し早く言えばよかったわね。」と言いつつズボンを脱がせると「お手洗いで練習してみようか」と温土を誘う、この辺のタイミングはさすがだ。温土も今までだったらいやがる所を一向にその気配もなくトイレに行く。「出ましたか？」「はい」等としばらく遊ぶ。温土は紙でふいてくれと言う。それもごっこ遊びの内だし、私としてはト

イレに関する手続は全て温土に任せてやりたいと思つていたので、女房に本當にふいてやればと助言する。そうこうした後、温土は女房にトイレから出るように言う、女房はちゃんと感じてそれに従う。しばらくして温土に呼ばれて女房がトイレに行つてみると何と本當のウンチが立派にしてあるではないか!! スゴイ!! 両親は二人して大喜び。温土も自信ありげに作品を見ている。今度は本當にふいてやつた後、ウンチャンにバイバイをして流す。三人とも少々興奮気味。ぼくはすっかり嬉しくなつて温土にまたブドウを分けてしまつた。温土は何と言おうか自分自身に感動しているようですっかりはしゃいでしまひなかなか寝ようとしなひ。我々も温土の喜びが分かるのでそれを少し大目に見ることにした。温土は遊びながら「ウンチャンできたのねー」と言う。いかにも成長の自覚といった感じだつた。女房とは、まあ今日の事は単に偶然だとしておこうと相談する。その方が温土によけいなプレッシャーをかけずに済むだろう。一番大事にしたひのは温土自身の喜びなのだから。ふりかえつ

て思うに、今日の夕方は私自身ゆとりがあつて温土も楽しく満足した一時を過ごせたのだと思う。特にこうなさい等と言わなくても、温土が満足な時を過ごす、温土の心の中で何かの力が温土を一つ大きくしようとするようだ。そしてその事が家族の喜びとなる。こんな自然な成長があつていいではないか。待つ事に乾杯!! 女房の常々に感謝!!

こんな事があつた後、おむつを全く必要としなくなつたのはそれから一ヶ月半後の事でした。二年半待つただけに、失敗の数はとても少なく、親のイライラは殆んどありませんでした。ついつい過大な期待をかけてしまつた時も、すぐに「いい、いい、またおむつをすればイライラしなくてすむのだから」と軌道をもとに戻すことができました。そして温土がおむつを必要としなくなる日があつて来たのでした。ひとりで食事ができる、お手洗ひに行くことができる、衣服の着脱ができるようになる過程では、その達成直前に、できたり、できなかった

り、しようとしたり、頼ったりの波があり、子どもも大人もイライラさせられます。しかしこの時期こそ、子どもにとっては大切な時期ではないでしょうか。させられていると感じるか、してみようと思えるかで全く異なった力が育っていくのです。イライラは最少限におさえて、それほど遠くない将来にできるようになることを願い、信じ、手伝ったり、励ましたり、ほめたり、時々は黙って見ていましょう。子どもはだましましたと言いますが、だますのは「私の心」である時もあるようです。

むすび

このように考えてくると親としては心と体にゆとりをもって生活していくことのどんなに大切であるかにあらためて気づかされます。楽しい気持ちでつき合おうと、さりと流れることが、こちらに少しのゆとりもなければ、ささいなことにこだわり、ぶつかり合い、かたくなになり、こじれてしまいます。不快な空気が家中にひろがって、共にいることがいやになってきます。しかし親

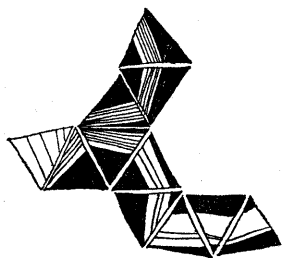
も人間ですから肉体的に調子のよくないこともありま
す。そんな時にゆとりを持とうとしても無理です。そこ
で私は、今は眠くて何もしたくない、あるいは疲れてイ
ライラしている、仕事がたまって焦っているなど私自身
の状態を把握し、自覚してなるべく伝えるようにしま
す。そうすると今度は子どもの方で、できる限り譲った
り、我慢したりしてくれるようです。そして私がそれを
いとおしく思い、そこに歩み寄りが生まれ、また共にい
ることが楽しくなります。まさに日々このくり返しにほ
かなりません。この現実の中で両親が互いに信頼し合
い、多くの和やかな時を子どもと共に持つことができ
ば、子ども自身の力が成長の方向へと自分自身を導いて
いくであろうと信じています。

※

※

※

近代短歌に現われた子ども (十二)



大塚 雅彦

(25) 柳原白蓮

白蓮は本名燁子、東京の麻布桜田町に明治十八年十月、伯爵柳原前光の妾腹の子（戸籍上は次女）として生まれた。生母おりようは柳橋から出ていた芸妓で、もとをただせば幕末の遣米使節となった幕府の外国奉行、新見豊前守正興のおき娘である。白蓮は九才にして北小路随光の養女となり、明治三十三年華族女学校を中退してその子資武と結婚（十六才）し一子功光をあげたが、三十八年に離婚し実家に戻った（功光氏は現在、京都府宇治市に居住、私とは一時、同じ短歌結社「樹木」に属していた歌人である）。四十二年、東洋英和女学校に入学、四十三年卒業。四十四年春二十七才にして、当時九州の炭鉱王といわれた五十二才の伊藤

伝右衛門と再婚し、福岡県の幸袋（さいがくら）（現飯塚市に属す）のいわゆる「あかがね御殿」に住み、その美貌と才筆とで「筑紫の女王」とうたわれた。

ところが大正十年、公開絶縁状を夫につきつけて伊藤家を出奔して去り、吉野作造博士の門下で「新人会」に属する若き社会運動家の東大生宮崎龍介の処に身を寄せた。龍介が雑誌「解放」の記者として白蓮の戯曲を刊行すべく彼女を訪い、恋が生まれていたのである。白蓮の叔母（前光の妹）愛子（なつこ）は宮中に入り「柳原一位の局」といわれ、大正天皇の御生母であり、白蓮は天皇のいとこにあたる。そのような女性がこともあろうに夫を棄てて七才年下の社会主義の学生のもとに走ったのであるから、世間は驚倒し、囂々たる非難が集中、兄前光は貴族院議員を辞職し、彼女は黒髪を切られ実家に監禁された。世にいう「白蓮事件」であるが、この「日本のノラ」（松永伍一『火の国の恋柳原白蓮』昭34・11）を当時の女性評論家のほとんどが非難した中で、中条（宮本）百合子だけが、理解と同情の立場に立った（永畑道

子『恋の華・白蓮事件』昭57・11）という。二年の後、龍介と正式に結婚し二児を得たが、結婚後もしばらくは、彼女は病弱な夫を扶けてもの書きをしつつ、女の細腕で生活を支えた。しかし、長男香織は太平洋戦争に早大在学中の身で学徒出陣により出征し、鹿屋基地で戦死した。戦後の彼女は宗教的世界に関心を持ち、平和運動に奔走し、「国際悲母の会」を結成したり、「世界連邦建設同盟」の婦人部長となって、日本各地や中国等を行脚し、活動を続けた。昭和四十二年二月逝去、八十一才。遺骨は相模湖の裏側の山中の顕鏡寺に亡児香織の骨と一緒に葬られた（永畑道子、前掲書）。遺族として長女蓼（らふ）冬子さんが婿（早大教授の理博宮崎智雄氏）を迎えて、後を継いでいる。

彼女は、十才頃から養父随光に短歌を学んだという。明治三十三年佐佐木信綱門に入り、四十四年頃より再びその添削を受けたらしい。昭和十年から歌誌「ことたま」を主宰し晩年に及んだ。処女歌集『踏絵』（大正4）により彼女は一躍有名になったが、その後『幻の華』

（大正8）、『白蓮自選歌集』（大正10）、『紫の梅』（大正14）、『流轉』（昭5）、『地平線』（昭31）等の歌集を刊行。その他、『几帳のかげ』（大正8）のような詩集、『筑紫集』（昭3）のような詩歌集もある。また、小説『荊棘の實』（昭3）や、戯曲『指蔓外道』（大正9）等もあり、多彩である。

白蓮は竹柏園の同門であつた九条武子とよく併称された。それは共に妾腹の子ながら、白蓮が伯爵家という堂上華族の出であり、武子が西本願寺法主大谷光瑞の妹という身で、共に高貴の出自でありながら、結婚しても武子が長く空閨を守り、白蓮もまた不幸な結婚をくり返すという風に家庭運が悪く、この数奇な運命をたどった艶麗の二人の閨秀歌人に世人が強い関心や同情を持ったこと、共に信綱門の才媛であつたこと等によるものであつたろう。実際に二人は仲もよく、親しい交遊関係もあつた。しかし決定的に違つたことがある。それは武子が夫との生活や子どもに恵まれず、むしろ社会奉仕、こんにちの社会福祉活動に挺身して、そのさなかに若くして病

没したのに対し、白蓮は前半生は兎も角、後年、大正デモクラシーの世潮に乗り得た好運もあつて、思想も境遇も異なる夫を得て幸せな家庭人としての生活をかち得て（もつとも息子の戦死という不幸は続いたが）長寿を全うしたことである。また、その歌風も著しく異つてゐる。その悲愁を作歌によつて支えたような点は共通性を感じさせるが、武子の歌が『金鈴』『薰染』『無憂華』等の歌集や歌文集等に見る如く典雅で、憂愁にみちたもので、敬虔な信仰や諦念の中に運命を見つめている点があるのに対し、白蓮の作品は烈しく情熱的で、「明星」的ロマンチズムに溢れている。師の佐佐木信綱は『踏繪』の序文に「深刻にかつ沈痛なる歌風」と書いており、「抑圧された生活の中で自我に目ざめんとしつつ脱皮に至る一步手前の呼吸が、異常な緊迫感をたたえ」（『和歌文学大辞典』五島茂担当、昭37・11）ている風がある。晩年の歌風は平明さを加えた面があるが、やはりロマンチズム的な抒情がのこり、要するに一言にしていえば、白蓮の詠風は「前近代的ロマンチックな歌風」

『近代短歌辞典』昭25・6)ということになる。

私は生前の白蓮に二度逢っている。その頃私は数人の国文学者たちと作った「近代詩歌懇話会」というのに属し、仲間と共に著名な詩人や歌人等を歴訪して回顧談を聴くことを続けていたのであるが、東京・目白の宮崎家を訪うたのは昭和三十八年三月十六日と十一月十九日で、聞き書きをとった(拙稿「柳原白蓮聞書」歌誌「地表」昭38年11月・39年1月号所載)。白髻の美しい龍介翁に逢うことも出来たが、白髪のみごとな白蓮女史にその波瀾万丈の生活史をうかがい、楽しい半日をすごした。彼女は華族の出身とは思えないザックバランな、むしろ下町のオカミさん風の率直な話しぶりで何でも気軽に話してくれた。既に緑内障で失明状態であったが、私たちの仲間の只一人の女性詩人の身体全体を手で確認するかのようになんごろに撫でさすった。「ああ、触覚で訪問者を記憶にとどめようとするこういう人間の確認のしかたもあるのか」と私は深く感動したのをおぼえている。

①ふた親の情けをしらぬわれながら子のためによき母

となる日よ

②汽車のおもちゃつみ木の山の次々に吾が膝もとをめぐる雨の日

①は歌集『紫の梅』より抄出。白蓮は前述の如く側室の子であり、公卿の家の里子制度に従って生れて間もなく品川の鈴ヶ森近くの種物屋に預けられて保育された。そのような父母の愛情を知らぬ生い立ちをした自分が今幸せな結婚して、わが子のためには良き母となろうとしている、というのであろう。彼女の苦勞した境涯を知ると共感できるものがある。歌人の川上小夜子は「烈しい恋愛をする人は又母性愛も強いらしい。恋愛のつぎに来るものは子供に対する母性愛である。この作者にも母の歌が可なり沢山にある」(新興出版社版『近代短歌講座』第三卷、昭25・12)と述べている。②は歌集『流轉』より抄出。歌意は明白で、子どもの玩具が膝もとに溢れている、という母親の喜びをうたっている。初期の『踏繪』のあの強烈な恋愛感情をうたいあげて、自我に溢れた奔放な詠風にくらべると別人の歌のような感がある

が、幸せにみちた家庭に恵まれ、母子一体の真情をうたった彼女の後の作風は「金魚うり子がききつけて門の戸の鈴うちならしいでゆく足音」等にも現われており、世間を震撼した事件の主人公の彼女もまたやさしい母親であったことを示している。それだけに後の愛児の陣歿は痛ましく、昭和二十年八月十一日、つまり敗戦の僅か四日前の「香織戦死す」の一連は「母は好きとはほにより来し子のぬくみふと思ひいづる日向ぼこして」等、哀切なものをふくんでいる。

(26) 五島美代子

本名は美代、明治三十一年七月東京の本郷で生まれた。父は動物学者の理学博士五島清太郎で当時旧制一高の教授（後に東大教授）であった。大正十二年、文検合格、十三年東大文学部の聴講生となる。十四年石樽茂（歌人石樽千亦の三男）を五島家に迎え結婚。十五年長女生誕。昭和四年、夫の大阪商大助教赴任と共に大阪に転住。六年に夫の留学に伴い長女を連れて渡英、二年

間の欧州生活を経て八年帰国。十二年次女出生。十八年母の後を承けて晚香女学校々長となる。二十四年専修大学講師、翌年教授となる（四十三年まで）。二十五年長女急逝。四十三年札幌大学教授となる（空路出講）。五十三年四月十五日、胃潰瘍、肝硬変で逝去、七十九才であった。

美代子は大正四年佐佐木信綱門に入った。昭和三年当時流行の唯物史観の影響を受け「新興歌人連盟」に加盟、「心の花」脱退。四年夫の茂や前川佐美雄と共に歌誌「尖端」を創刊したが半年で廃刊。プロレタリア歌人同盟にも加盟したが、間もなく脱退。八年、外国より帰った後「心の花」に復帰。十三年、夫の茂と共に歌誌「立春」を大阪で創刊。戦時中は歌誌統合で他誌と合併したが、二十一年「立春」復刊、夫と共に主宰編集して晩年に至った。歌集は『暖流』（昭11）、『丘の上』（昭23）、『風』（昭25）、『炎と雪』（昭27）、『いのちありけり』（昭36）、『時差』（昭43）、『垂水』（昭48）、『花激つ』（昭53、歿後の刊）等すこぶる多い。また、『赤道圏』

（昭15）、芸術院賞候補となった『母の歌集』（昭28）、読売文学賞を受賞した『新輯母の歌集』（昭32）、『そらなり』（昭46）等の自選歌集も多い。『五島美代子全歌集』（昭38・11短歌研究社）もあったが、更に最近、夫君茂氏編の劃期的な『定本五島美代子全歌集』（昭58・4短歌新聞社）が上梓された。

彼女の歌壇内外での活躍も著しく、昭和十年代の注目すべき歌集『新風十人』（昭15）に参加、戦後は「朝日歌壇」選者（昭30・53）を長くつとめたり、歌会始選者をしたり、皇太子妃の作歌指導役をしたりした。女流歌人の集団によって創刊（昭24）された「女人短歌」初期の編集同人もした。日本ペンクラブ、日本文芸家協会の会員でもあった。『婦人のための短歌のつくり方』『私の短歌』等の啓蒙書的な著述もある。若い頃はマルクス主義的な新興思想に動かされたが、後年の動きは上述の如くで、かなり振幅の多かった歌人であるといえよう。なお、夫君の五島茂氏（経済学博士、欧州経済思想史専攻、ロバート・オウエンの研究家として著名）も現役歌

人で、現代歌人協会理事長などした歌壇の重鎮である。

彼女は「母の歌人」として定評があった。史上多くの女流歌人が母子関係をうたつて来てはいる。しかし「子供を題材にした作品は数多いのだが、母そのものを追求したもの、ほとんどない。……その〈母〉を短歌にとりこんだ先駆者ともいうべき女流歌人」（尾崎左永子『女人歌抄』昭58・1）と美代子は評価されている。川田順が『暖流』の序文で述べているように、古来女性の恋愛の歌や夫婦愛の歌は数がすこぶる多く佳吟も少なくないが、「母性愛の歌に至っては量も質もいぢるしく劣る」のに、美代子の歌が「全く新しい母性愛の発露がたくさん見られる」もので「美代子さんは……母性愛の歌によって、前人未踏の地へ、すこやかに第一歩を踏み入れた」ものであった。しかも後に愛児の自死という逆縁のかなしさをも体験し、母親の悲哀をも痛烈に味わいつくした。彼女自身も「あしかけ三十年のあいだの私の最大の関心はわが子であった。従つて子を対象にした歌は私の全作品の過半数を占めている」（『母の歌集』あとが

き」と告白しているが、「母となつて三十年の歳月に、氏は母性の短歌をきわめた」（上田三四二『現代歌人論』昭44・12）ということになるであらうか――。

①胎動のおほにしづけきあしたかな吾子の思ひもやすけかるらし

②この日頃うるほひ深む吾子の瞳にをとめうごきてあやぶきものを

③乳呑児と百日こもれば小刀の刃にもおびゆるころとなれり

④ひたひ髪吹き分けられて朝風にもの言ひむせぶ子は稚なし

①は歌集『暖流』より抄出。「胎動」一連の中にある。

「おほに」は、何の気なしに、おおよそに、の意。ふと気付くと胎動が何かな静かな感じの朝だ、胎中の吾が子の思いもまた私と同じように安らかであるらしい、というのであらう。始めて母となる身の深い思いを湛えた一首であり、胎動というものをうたった珍らしい作品である。「我ならぬ生命の音をわが体内にききつつこころさ

びしむものを」という歌なども一連の中にある。②は歌集『丘の上』より抄いた。「童女と胎児」一連の中にある。すなわち、長女ひとみ（このとき十一才）と胎児（次女・いずみ）の両方が素材とされている一連であり、「ひそやかに母により来て胎内のはらからにと吾子のもいふらしも」という歌が続いている。抄出歌は、童年期を脱して少女に向う長女の瞳に、うるおいが深まりをとめ心のような鋭いものが早くも動くような気配がして、心配しながら母の自分はじっと見つめる、という微妙な母情を詠出している。「ものを」の「を」は感動を現わす助詞で、『暖流』に「少しずつもの解き初めし子の前に母とおかれてまどへるものを」がある。③も『丘の上』所収で「支那事变勃発」の題があり、昭和十二年（一九三七年）の時局が背景にうたわれている。この年五月八日、作者は次女を出産した。七月七日に蘆溝橋事件で日中戦争が始まり、八月には上海でも両軍が衝突し、暗黒の時代に進んでゆくが、作者は産後嬰兒と約九十日間臥床にあつてこの慌しく緊迫した時世を意識してい

る。そして、もしや生れた吾が子にも不幸が及ぶのではないかという母親の本能のようなものがひらめき、小刀の刃にもおびえるような気持ちにさせられるというので、女性ならではの心情をこめた鋭い一首である。④も『丘の上』所収。この「子」は当時満二才くらいの次女であらう。朝風にひたいの上の髪を吹き分けられ、もの言い咽んでゐる幼児を描き、これまたすぐれた作だ。

⑤うつそ身は母たるべくも生れ来しをとめながらに逝かしめにけり

⑥わが胎にはぐくみし日の組織などこの骨片には残らざるべし

⑦白百合の花びら蒼み昏れゆけば拾ひ残しし骨ある如し

⑧亡き子来て袖ひるがへしこぐと思ふ月白き夜の庭のブランコ

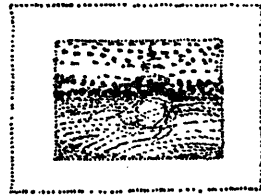
⑨子をうみしおぼえある身にひびき来て吾子のみごもりや深むころ

作者は昭和二十五年一月、愛する長女ひとみ（東京女

高師を卒業し、東大在学中）を亡くした。しかも自殺だった。これは作者の身を裂くような絶望的な出来事だった。⑤⑥⑦はその折の悲痛をうたったもので歌集『風』

にある。妻となり母となるべかりし身を処女のまま死んだ子を悼む⑤や、子の遺骨を抱き、この子を胎に抱いた時を想起する⑥や、夕ぐれの白百合の花に故人を追想して、かなしいロマンを湛えた挽歌⑦の慟哭。この折の亡児詠にはすぐれた作品が多くまさに絶唱といえよう。⑧は歌集『いのちありけり』所収。月明の夜の庭に亡児が袖をひるがえしてこいでいるかとかの間思うブランコ。作者はその後くり返し尽きることなく、幽明境を異にした子をうたっている。⑨は歌集『時差』所収。次女いづみは昭和三十八年七月女兒を出産したが、その直前頃の作であらう。娘が子を産む、祖母となる私がかつてその娘を産んだのだと思い、娘の産み月の迫るのを自分のことのように感じている——祖母・娘・孫の三代の女の系譜のつながりの生理をうたい上げた珍らしい歌で、男性である私も不思議な感銘を与えられるのである。

私のまわりの子どもたち



佐藤京子

公開保育を見て、懇談の中で一人の母親が信じられないという顔つきで保育者に語った。「家の子どもはまったく外に出したことがなく、家の中で兄弟とばかり遊ぶことが多かった。外で遊ぶことや、鉄棒、はんとろ棒で遊ぶという運動能力はまるっきりだめだと思っていました。今日の保育で竹馬がこん

なに上手にのれるとは思ってもみませんでした。」
とうれしそうに息をはずませて話をした。「お店は、夜が遅いので、朝が早く起きられなく、子どもに起こされてしまい、子どもにはすまないと思っています。」と重ねて話をされた。

別な母親からは、やはり店を夜おそくまでやって

いるのでどうしても子どもの生活リズムが夜型になってしまっていた。先生から朝あくびをしたり、覇気がないということをいわれて気になっていた。たしかに夕方になって来ると、子どもの目がかがやいてきていた様です。この様な生活を変えていかねばと父親とマラソンを始めて、今では時間になると、自分から起き出して、マラソンをやる様になって来ています。父親と車を使わないで、バスで通園する様にもしています。

「子どもから友だちが遊んでくれないとよくきかされていました。今日は子ども同志で仲よく遊んでいる様子がみられてうれい。家では大人が多いし、お客さん相手の仕事をしているので、大人のつき合いは上手であるが、子どもとは上手く遊ぶことが出来ないで心配でした。今日、園での様子をみて安心しました。」といろいろと話が出された。

子ども達の家庭環境は自営業が多い。その大部分は飲食関係をしめる。母親も従業員の一として、

人手の数に入れられ、働き手の中心をなしている。又は母親が店を経営するといったことも多い。従って深夜まで店をあけている事が多く、家の中では、母親は忙しいを通りこしている状態で、子どもの相手をする、育児をすることは他人まかせにしている、店には子どもが出来るだけ顔をださない様にさせ、子どもの好きな様にすごさせている。その代償として、「物を与える」ということで、子どもに愛情をしめしている。常に現金が入って来るので、子ども達は次から次と新しい玩具を買ってもらい、子どもたちもお金を使いなれているし、物を買いたいっている。通園カバンにキーホルダーをいっぱいぶらさげて、みせびらかす、休みには毎回、都内で、てがるにいける遊園地に何回もつれていってもらい、手みじかに遊ばせてもらう傾向を身につけていて、子ども達は満足させられている。どうしても大人中心に、子どもの生活があるので、子どもに合った生活のリズムが出来ない。

個々の子どもについて園での過ごし方や、友だち関係について、例をあげて親の方に話し、夜は早くねかせてほしい、出来るだけ決められた時間に登園してほしい、夕食は時間を決めて親と一緒に食べてほしいと、お願いしても、「この様にすることは、

子どもに必要なことで大事なことはわかっています。だけど、今はとても出来ないのです、学校にいったらきちんとやりたい。私が入ってしまうと従業員にしがつかない。子どもの世話を他人にまかせるのは親としてやりきれない思いです。」という答が返ってくる。くり返し、くり返し話をしていくと、早く登園してくれるが、二・三日たつと子どもがなかなか起きてくれませんので、子どものせいにして、大人中心の生活を営んでいる。

子ども達の園での生活は、前日の疲れをそのまま園に持って来ている様な状態が見られる。うたをうたっているときでもアクビをする、保育母の話がきけない、鬼ごっこしても鬼になるとやめてしまつて組

織的な遊びに発展しない。保育母の意図することが頭に入らず深く考えずに単発的な答がすぐに返ってくる。形になるものは喜こんでとりくむが、努力して形をつくるのはよわいといった状態である。

子ども達の性格は大たんでのびのびとしているが、時には自分の思う通りにならないとヒステリックになったり、友だちが遊んでくれないと泣き出したりし、子ども同志仲良く遊ぶということが出来ない子どももいる。

家での生活の影響が、保育園での子どもの生活に、この様な状態で現われるので、子どもの生活に何が大切かを公開保育を通して、親に考えてもらう様につとめる。

まず子ども達には子ども同志の結びつきや遊ぶたのしさを知らせていこうと、手をつかうことからはじめ、体を動かして遊ぶということを全面的に保育の中にとり入れていった。子ども達は毎日毎日少しずつではあったが、根気よくはんと棒や鉄棒にと

りくみ、一つずつ遊びの形がととのっていくと、行動に自信がついて来て、子どもの方から、朝夕の登降園のとき、親にはんとう棒がのぼれる様になったからみてと見てもらい、親の方でもがんばってねと見守っていける余裕が出来、すこしずつではあるが、園での子どもの様子に関心をみい出した。相変わらず、テレビを夜遅くまでみたり、親がねるまで起きている子も多いが、子ども同志の会話からは、

「学校は朝早いから夜早くねなくてはいけないんだよ」と夜遅くまで起きている子にさとす様な話が出る様になり、「だってお母さんがそういったよ」と入学を前に親の方でもにわかでも、少しずつ生活をととのえようとする気配が見えて来ただけでもうれしい。

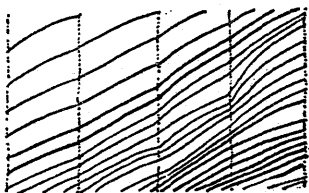
今回の公開保育を通し、子どもの園での生活をふりかえってみて、子どもの生活の変化、子どもの成長発達していく過程から、「子どもからはいろいろ

と教わりました。子どもを大人のベースで育てて、よくここまで育てて来たと思います。親の方が育っていない様で恥かしいと思います。子どもの生活に何が大切かがわかって来ただけでもうれしく思います。これからは子どもの生活を大切にしていきたい」とこの様な感想が参加した親の方から出て来た。

子どもの成長発達をうながすものとして、親と子の愛情で結ばれる信頼関係も大切な一つとしてうかがわれる。保育園のはたす役割の一つとしてこの親と子の信頼関係を豊かにするための土壌づくりをしていかねばならないと感じている今日この頃である。

(港区・飯倉保育園)

エリクソンと幼児教育 (19)



生 弥 科 仁

エリクソンの子ども観について

「私たちの子どもたちの子どもへ」捧げられた『幼児期と社会』（一九五〇年）は、「児童期を不合理な恐怖をつくり出す兵器工場として利用し続けていてよいものか、それとも、大人と子どもの関係を、他の同じように不平等な関係と共に、もっと合理的な秩序の中の仲間同士の関係の位置にまで高めるべきか、われわれはその決断を迫られている。」というその第一章の結びの言葉にうかがわれるように、エリクソンが大きな危機感のもとに現代の幼児童期のあり方をあらためて問直した書でもあった。

そこで、今回と次回にわたって、エリクソンの子ども観について考察して、「エリクソンと幼児教育」の拙稿を結びたいと思う。

まずエリクソンはその初版のまえがきで次のように述べている。「これは幼児期に関する書でもある。歴史、社会、道徳に関するいろいろな書物を読んでみて、人

間は誰でもまず子どもとして出発し、世界中の民族はすべて子ども部屋から始まるという事実と言及しているものはきわめて少い。これは幼児期に関するわれわれの意識の問題にあることの指摘である。そして彼が、同一性の強化を遅らせる文化的障害として、文明の拡大傾向とその階層化と専門化とが進むにつれて、幼児童期が、人の一生の中の一つの切り離された区分となり、その区分固有の伝説や文学をもつようになった現状をあげたことについては、前回ですでに触れた通りである。つまり、子どもが自我の統合において、彼らの存在に関連する社会の区分以外を包含することがきわめて困難になったというところが、彼らの同一性の形成をむつかしくする一因である、と彼は批判したのである。

ところで、この幼児童期について、フィリップ・アリエスが『《子供》の誕生』（一九六〇年）の中で、「子ども」「子ども期」という觀念の歴史的発展をあとづけている。ちなみに、アリエスによれば、中世の生活は「事実と殆どいかなるプライバイシーも存在せず、四六時中來

客の無遠慮にさらされている家の中で、主人も奉公人も、子どもも大人も、混って暮らしていた」という。そのような社会的に濃密な共同の生活には、家族そのものが意識や価値としては存在していなかったのである。その後、ようやく十五世紀から十八世紀にかけて家族意識が発生したが、それもはじめは貴族やブルジョア、職人や商人の名士たちという階層に限定されていた。家族意識がやがてあらゆる身分に拡まり、それに伴って子どもが匿名の状態から抜け出したのは十八世紀以後のことであつたという彼の発見はわれわれの注意をひく。

つまり、中世においては、「子ども」ははっきりと表象されておらず、子ども期に相当する期間は「小さな大人」がひとりで自分の用を足すには足りない期間に切りつめられていたのである。そして、子どもは七歳位になるとすぐに大人たちと一緒にされ、毎日の仕事や遊びを共有していたという。

また中世文明は教育という觀念をもたないでいたことが明らかにされている。子どもたちは両親から引き離さ

れ、他の子どもや大人たちと混在する徒弟修業に出され、そこで大人たちの仕事を手伝いながら、知るべきことを学んでいたのである。教育的配慮が出現したのは近世に入ってからである。といっても、たとえば人文主義者たちは人間の教養ということを重視するにとどまっていた、子どもたちだけを対象とする教育には殆ど関心を示さなかった。その中で、人文主義者であるよりはモラリストであった宗教改革の支持者たちが、中世社会の無規律状態とたたかい、また道徳秩序の擁護者たちが教育の重要性を説くようになったという。こうして、教育が大人に対してではなく、本質的に子どもと青年に対してなされるようになったのである。そして、子どもは人生に入っていくにはまだ十分成熟していないことや、子どもを大人と一緒に混交するに先立って、その準備をさせるために、隔離された、ある特殊な制度のもとに置く必要があることなどが認められるようになった。この準備を、徒弟修業に代って子どもに保障するために出現したのが学校であった。

このように、アリエスは、家庭と学校とが一緒になって、大人たちの世界から子どもを引きあげさせた過程を描き出し、さらに、かつては自由放任であった学校が子どもたちをいだいに厳格になっていく規律の体制に閉じこめていった歴史を明らかにした。そして彼は「最小の空間の中に諸々の生活様式を最大限に集中させ、全くかけ離れて身分のちがう人々をバロック的に近づけていた古い社会とは反対の社会では、居住空間や市街の再編成と、閉鎖的な近代大家族によって、穏和な仕方だが、権力の関係によって枠組がつくられ、管理化がおしすすめられている。」と問題提起を行ったのである。してみると、大人から切り離された長い幼児童期を大人と子どもの不平等な関係としてとらえ、そこに生じる子どもの恐怖の研究に乗り出したエリクソンは、まさにその囲い込まれた者の心理に研究と思考を進めようとしたということになる。

さて、エリクソンの自我発達理論の一つの特徴は、自我機能と社会的現実と生物学的存在という三者が相互性

という概念で統合されているところにある。すなわち、発達していく個人とその社会的環境（母親）との間の調整が自我のはたつきによって相互補完的に行われうと想定されている。エリクソンの子ども観はその相互性の概念の中にもっともよく表現されていると思われる。

そこで、まず相互性の概念について述べなければならぬ。エリクソンは、新生児はたしかに物理的環境を支配する何物をももってはいないが、そのもろさ、その弱さ自体が大人の注意を引き、家族を支配し、家族を動かすという事実に注目する。つまり新生児の弱々しさが見守る母親の関心をさそい、そして世話をさせることによって、さらに母親の養育熱をおおるといふ。このように母子関係は最初期から相互交渉的であって、どのような反応形式が生物学的に与えられていようと、それらは一連の変化する相互調節の形式の可能性である、とエリクソンは考える。しかも、それは単に身体的反応の相互調節の問題でとどまるものではなく、乳児は母親との相互調整の経験から発達課題である基本的な信頼関係を学ぶ

ことになる、と加えている。

ところで、エリクソンが人間の全生涯を統合性をもった心理社会的現象としてとらえ、それを八つの発達段階に分けて、その各段階に発達課題を仮定したことについてはすでに触れた。われわれは成年期の発達課題を彼がどのように考えているのかをみてみなければならないだろう。

成年期において、人は社会の中で自分の占める場所を固めはじめ、それぞれ場でさまざまな業績をあげることに熱心になる。エリクソンはこの段階の課題を *generativity* 生殖性と呼んでいる。これは彼の造語と考えられている。フロイトの *genitality* 性器的成熟の概念をこえて、この生殖性の概念は、次の世代を生み、これを導くための配慮をはじめ、生産や創造など人間の生み出すものすべてを包含する。そして生殖性の反対の極は停滞であると想定されている。人は生み出したものを育み、時には苦勞し、そのことがまたはりあいとなって、豊かに成熟する。これがうまく果されないと、沈滞感、

倦怠感、対人関係の貧困化、自己への没入などが生じるというのである。そして世話をこの時期の徳目としてエリクソンが考えたことにここで特に注目したい。つまり、自分の生み出したものに対して、責任をもって世話をすることがあげられているのである。彼によれば、親であるということは大部分の人にとってはもっとも重要な生産的経験であるが、たとえ子どもを生まなくても、他人の子どもの世話や、子どもたちのためのよりよい社会の建設に参加することによっても生産的たりうるという。勿論、子どもを生み育てながら、文化的創造を行うこともできるし、また人類の存続は多くの労働者や芸術家や思想家の生産性にも依存していることはいうまでもない。したがって生み出されたものすべてに対する広がる関心であり、それを育て、守ることを意味していることがわかる。

そして世話することに伴う両面価値感情にまで洞察を深めて、エリクソンは、人間は他人から求められることを願う要求をもっていると想定する。このことについて

彼は次のように述べている。「子どもたちの大人への依存を芝居がかりに表現したがる当世風の主張のために、しばしばわれわれは年取った世代が若い世代に依存している事実を見落しがちである。成熟した人間は必要とされることを必要とする。成熟は、生み出され、世話を必要とするものから激励は勿論、導きをも必要としているのである。」（『幼児期と社会』）つまり、われわれは他人から必要とされることを求めるので、自分の生み出したもの、育てねばならないものを守り、世話をし、そしてやがて自分を乗り越えるものからの厳しい働きかけをも必要とするというのである。すなわちわれわれの世話も相互補完的であるにとらえられているのである。そして、さらに次のように説明する。「人間が、心理社会的に生きていけるのは、この基本的な徳目によって守られており、この徳目が、歴史的につながりかさなり合っている世代の相互交渉の中で発達し、体制化されていく状況の中で、われわれが共に生きていくからである。ここで共に生きる、というのは、単なる偶然のつながりという

意味ではない。個人の人生におけるいくつかの段階は、他者の段階とかさなり合いながら生きつづけ、一方が動く、他方も動く歯車のように噛み合いながらすすみいくものである。」（『洞察と責任』）言いかえると、一人の

個人の発達段階は、かかわりあう他者の発達段階と対応して、人間は相互に生きているのである。無力な子どもは自分の欲求を満たすために母親の援助を求める。これに対して母親は、自分の発達課題を全うするために生殖性の一つの課題として子どもの世話をするという。そこには、成年期と幼児期が接し、かつ互いに調整し合うという考え方が提示されている。そして親と子は根本的に協調関係の上に成り立っており、その育て合う関係は全く互角であるという相互性が強調されている。この相互性が確立されたとき、子どもは健康な子どもとなり、母親は健全な母親となつて、両者はともに自分の発達課題を遂行したことになるのである。したがって、母親であろうと、子どもであろうと、互いに自分の発達課題に取り組んでいるという意味で、両者は対等であり、その関

係はけつして強者と弱者、搾取者と被搾取者の関係であつてはならない、とエリクソンは主張する。そこに、子どもを対等の他者とみるエリクソンの子ども観が面目躍如として打ち出されている。

そしてまた、育児やしつけのためだけの問題としてではなく、大人も自分の発達の課題として受け止めるべきであるとするエリクソンの考え方は傾聴に価すると思われる。なぜなら、世代や社会と人間の本性とのかかわりについてのこの思想は、とくに、出産や育児の負担を女性個人の同一性の確立を困難にするものと受け止めて、生きがい感の喪失に悩む人々にとって、一つの大きな発想の転換性を示唆してくれているからである。

ところで、エリクソンのこのような子ども観は精神分析医としての臨床経験から、とくに神経的不安の研究から生まれたのである。

まず彼は比較的考察から次の点を指摘する。すなわち、子ども時代が長いのは人間の特色である。部族や国家は集団独自の大人の同一性、つまり彼ら独特の人格的

統合を個人が獲得するように、いろいろな直観的な方法で子どものしつけを利用してきた。しかし、彼らがそれぞれ特色のある方法で利用した幼児期のその状態の中から実は不合理な恐怖が生れ、それによって大人たちは悩まされ、また悩みつづけている。なぜなら、長い幼児年期はしばしば残酷にも子どもの依存性を搾取する誘惑に大人をさそい、一方、子どもは大きな不安といつまでも続く不安定感にさらされることになるからである。

次に、恐怖と不安の違いについて一寸触れておこう。恐怖は認識しうる危険に対して、それを分別をもって判断したり、現実的に対処したりできるような懸念の精神状態である。一方、不安は、緊張が拡散している精神状態で、外界の危険を拡大してみせたり、ありもしない危険の幻想を抱かせたりする。しかも、それは危険を防いだり支配したりするための適切な方法を指示することはないとされている。

子どもの場合、恐怖と不安の違いは大人のそのようにはっきりしたものではない。なぜなら、身体的、知的

機能が未熟なために、内面的危険、現実の危険と想像上の危険とを区別することができないからである。勿論、子どもはそれを学ばねばならない。しかしその場合、安心を与えられるような大人の導きに助けられて一步一步判断力と統御力を発達させることが大切であるという。なぜなら、子どもは、大人の理屈を納得できなかった場合や、或は大人の隠された恐怖やとまどいに気づいた場合、つかみどころのない破滅のパニック感におそわれるからである。そして子どもらしい非合理的な恐怖を抱きやすくなり、また恐怖の中で不安をつのらせることになる。エリクソンは、このような幼児期の恐怖が大人の抱く多くの非合理的な不安の先駆をなすとしてそれらに注目したのである。

しかも、大人からの統制は、その時の子どもの自己抑制の能力に見合わないことが多いために、子どもに避けがたい負担を課すことになり、それは子どもの心に怒りと不安の悪循環を引き起こす。エリクソンは、それが、過度に強制されたり、操られたりすることに対する不寛

容性としていつまでもわれわれの心に残ることになると分析している。

また、大人の判断力がしばしば幼児期に経験した緊張と怒りによって損われることがあるのは、合理的な大人の恐怖と、それに関連した幼児期の不安との間に短絡が生じて非合理的な緊張状態が引き起こされるためであると説明する。そして、われわれは不安以外に恐れるものは何もないといわれる所以も、実はそこにある、とエリクソンはみる。われわれと非合理的な行動や非合理的な思考の飛躍に、或は非合理的にも危険の否認にまで駆り立てるのは、連想によって生じた漫然とした不安の状態に対する恐怖であって、危険に対する恐怖ではないからである。このような不安で脅やかされると、われわれは恐れる理由のない危険を拡大視したり、逆に恐れなければならぬ危険を無視したりするのである。それゆえ、不安に屈することなく恐怖を意識できること、つまり不安に直面しても、恐れなければならぬものを正確に判断しうるものが、思慮分別のある精神構造にとってきわ

めて重要な条件となる。エリクソンは、それには、まずわれわれが人生の第一の不平等は子どもと大人の関係であることに気づき、それを対等の育て合う関係としてとらえ直すこと、幼児期のしつけによって損われてしまいがちな正確に恐れ、賢明に協力するという能力を取りもどすことが先決であると考ええる。そして、そのためには、われわれの不安の幼児期の起源にまでわれわれの認識を広げる必要があるとして、恐怖の解説を試みていく。その詳細については次回にゆずろう。

参考文献

Ariès, P., 『〈子供〉の誕生』 杉山他訳

みすず書房 一九八〇

Erikson, E. H., 『幼児期と社会』 前掲書

『洞察と責任』 前掲書

季節が変る。然し、自然のうつろいにもまして、社会の変化の方が速やかであるようにも見える。昨日のニュースはもう影を潜め、今朝の事件は夕刻には既に衝撃力を失なう。そして、何よりも目に著しいのは、それらを伝える「言葉の衰弱」である。言葉からはもう意味がはがれてしまっているのに、無理やり仕様となしにそれらを引きずって、何かを伝えようという、「身振り」だけが騒々しい。そんな言葉に囲繞されて、賑々しくニュース種子にされる子どもたちを見ていると、しみじみ、「子ども受難の時代」だと思わされてくる。実体としての子どもの置かれてゐる不幸にもまして、メタレベルの虐待が目余る。形骸化した「言葉たち」を子どもから取り除いてやる試みが、必要とされているのかも知れない。

江戸時代に、周期的にくり返された

「おかげまいり」の群れには、いつも、夥しい数の子どもが含まれていたという。しかも、彼らの殆んどが、家人の制止をまかえりみず、家をとび出して、伊勢へ向かったらしい。中には、子守りしていて、赤ん坊を背負ったまま列に加わったものもあるという。

「おかげでさ、するりとな

抜けたとき」

子どもたちは、単調なリズムにあわせて声を張り上げつつ、草履を引きずって歩き続けたのだ。憑かれたように……。

大人たちの理解を拒むこの行動は、彼らの「身体」が、何にもまして、時代と文化への挑発者であり、反撃者であることを証している。私どもが、形骸化した言葉を意味ありげに取り繕って、あれやこれやと子どもらを囲いこむことに熱中している間に、彼らは、「するりと」抜け出し、未知へ向かつて歩き出しているのではなからうか。

(H)

幼児の教育 第八十二巻 第九号

九月号 ◎

定価三〇〇円

昭和五十八年 八月二十五日 印刷

昭和五十八年 九月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本田 和子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発行所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

保育実技シリーズ

2. 幼児の体育あそび 1

マット・ボール編 三宅照子著

体の器用さを伸ばすのに有効なマ
ット遊び、子どもにとって最も身

近なボール遊びの初歩的な指導方
法を紹介する。

B5判・120頁・定価1,000円

6. 幼児の体育あそび 3

鉄棒・フープ・トランポリン編 三宅照子・桑原芳子共著

幼児が積極的にさまざまな遊具に
とり組めるためには、先生の補助

の仕方が重要である。詳細にわた
る補助の解説が大きな特徴。

B5判・112頁・定価1,000円

14. 幼児の体力と運動あそび

近藤充夫著

幼児の体力づくりを発達の姿に即
して指導できるように、種々の運

動能力のテスト法と測定方法、テ
ストの活用などイラストで解説。

B5判・128頁・定価1,000円

新刊!

ひがし くん べい

東君平こゆびどうわ(1)(2)

東 君平・著

A5変形判・上製本・(1)(2)とも各72頁

定価(1)・(2)とも各900円

赤ちゃんのこゆびの ように短くてかわいいお話集。

ふだんのさり気ない暮らしの中のできごとを、子どもの心とおとなの視線をまじえて、独特な絵とともに描いた東君平の短い短いお話集。

すべて書きおろしの32篇がそれぞれの巻に収録されています。

保育の中で子どもにお話をねだられたとき、先生が一人で味わいたいとき、そして親子で読書をしたいとき、それぞれに楽しめるお話集です。

東 君平——独特な絵と文で、毎日新聞の「おはようどうわ」をはじめ、童話や絵本の分野で活躍中。